

育教子女
史洋東編新

(用校學女等高)

士博學文
著郎四久山中

據準目要授教新

阪大 堂省三 京東

教科
429
2008

42988

教科書文庫

4
220
42-1939
20000 89530

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

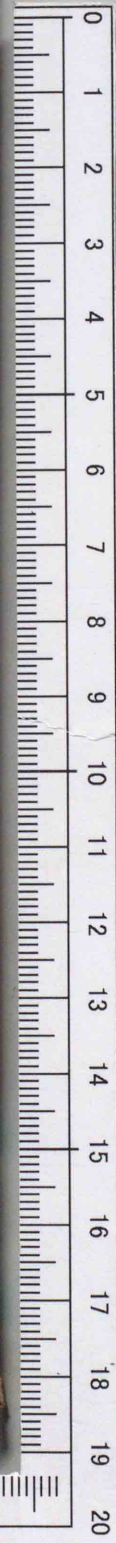


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



日四十二月一十年四十和昭
濟定檢省部文
用科史歷校學女等高

教科書文庫

4

220

42-1939

2000089530

教育学科
資料室

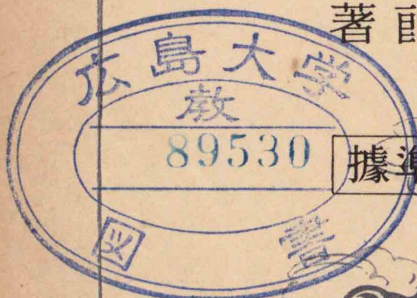
4b
220
AB14

育教子女
史洋東編新

(用校學女等高)

授教學大科理文京東
士博學文

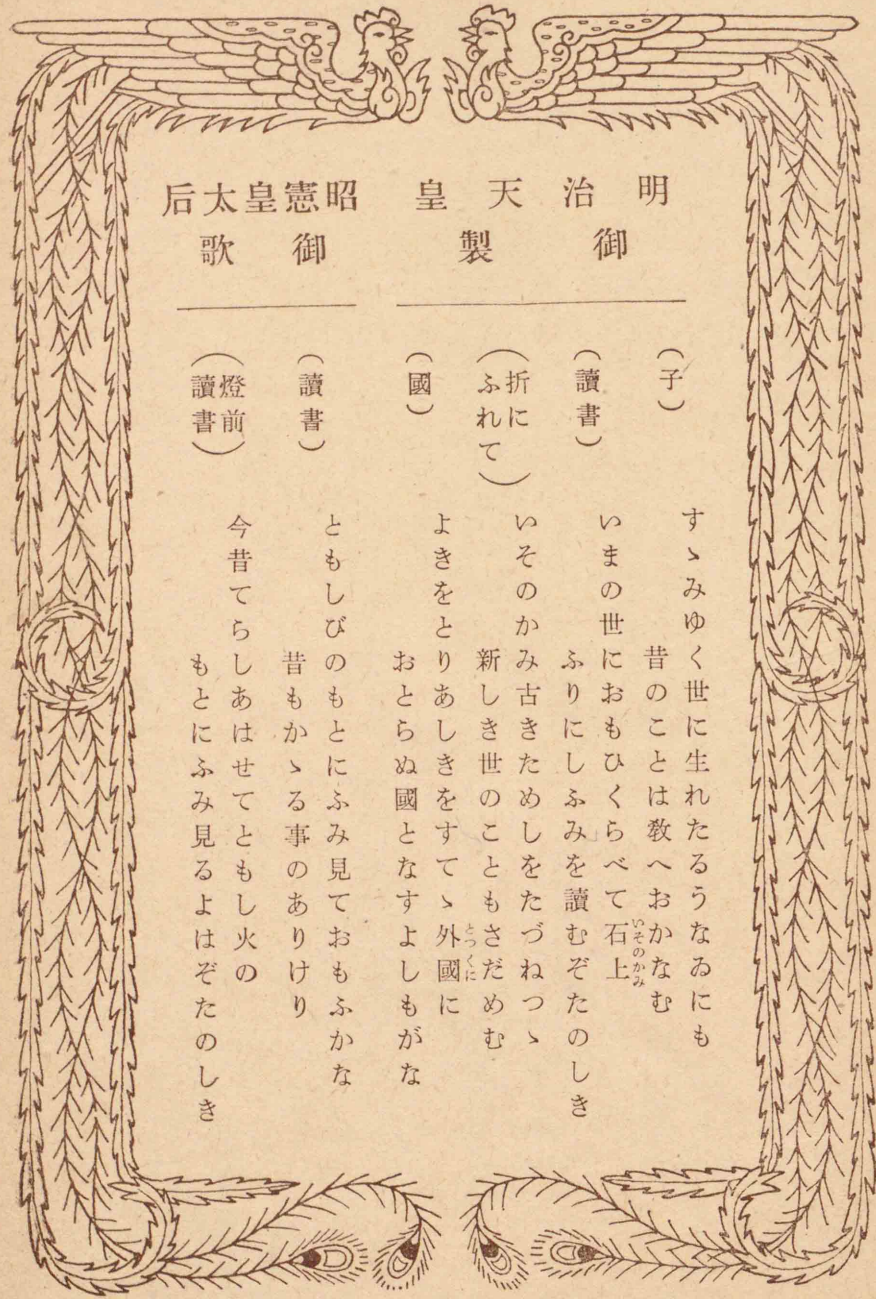
著郎四久山中



據準自要授教新



阪大 堂 省 三 京東



明治天皇 昭憲皇后
御製 御歌

(子)

(讀書)

(折れて)

(國)

(讀書)

(燈前
讀書)

すゝみゆく世に生れたるうなるにも

昔のことは教へおかなむ

いまの世におもひくらべて石上いそのかみ

ふりにしふみを讀むぞたのしき

いそのかみ古きためしをたづねつゝ

新しき世のこともさだめむ

よきをとりあしきをすてゝ外國とくごくにに

おとらぬ國となすよしもがな

ともしびのもとにふみ見ておもふかな

昔もかゝる事のありけり

今昔てらしあはせてともし火の

もとにふみ見るよはぞたのしき

源 隆 東 弟 央

広島大学図書
2000089530
[Barcode]

例言

一、本書は、高等女學校に於ける外國史(東洋史)の教科書として著述したものであります。

一、本書各章の目次は、昭和十二年三月二十七日改正公布の文部省所定の高等女學校歴史教授要目に準據したものであります。

一、本書の記事は平易を主とし、事實の連絡に注意し、逸話・傳説及び和歌を附録し、また多くの圖畫をのせて讀者の理解を助け、感興を増さしめることに努めました。なほ一般史實の中、道德的教材と文化史的教材と女性史實教材の記述には特に注意したつもりであります。

一、本書中の紀年は、皇紀を本として、既に修めたる國史との關係を保たせることをはかり、且つ重要な紀年には、我が歷朝の御諡、又は將軍・執權等の名を併せ記しました。但し明治以後に起つた事實には、便宜上明治以後の年

敷を記しました。また東洋史は西洋史と相ならんで外國史の一半をなすものであるから、便宜上西洋紀元をも附記したところもあります。

一、本書の處々に歴代の系譜の主なものを載せ、卷末には沿革摘要の年表を掲げ、また歴史地圖を附加しました。讀者は是非之を参照せられたい。

二、以上の諸點は、著者の聊か注意した所でありますが、史料の選擇・排列及び文辭、その他の點についてなほ缺點がありませう。大方の諸氏より示教を賜はらば、ひとり著者の幸のみではなからうと思ひます。

皇紀二千五百九十七年

昭和十二年七月十二日

中山久四郎識す

女子教育
新編東洋史

目次

第一章	東洋史の意義……………	一
第二章	上代の支那及び印度……………	三
第三章	秦・漢時代……………	一三
第四章	三國・兩晉・南北朝時代……………	二四
第五章	隋・唐時代……………	三三
第六章	五代・宋時代……………	四三
第七章	元時代……………	四九
第八章	明時代……………	五五
第九章	清時代……………	六六

第十章 歐米諸國のアジヤ經略…………… 六五

第十一章 清の末路と中華民國…………… 七五

第十二章 滿洲帝國…………… 八五

第十三章 現代の東洋…………… 八八

第十四章 東洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟…………… 九一

〔歷代地圖〕

第一圖

- 亞細亞地勢略圖
- 周代以前要地圖
- 春秋時代要圖
- 戰國時代略圖
- 古朝鮮略圖
- 印度古代佛教靈場並に亞歷山大王遠征行路略圖

第二圖

- 漢代亞細亞圖
- 漢楚分爭圖
- 三國鼎立圖

第三圖

- 唐代亞細亞圖
- 北宋遼西夏對立圖

●南宋・金・西夏對立時代圖

第四圖

●元代亞細亞圖

●元代版圖擴張圖

第五圖

●明代亞細亞圖

●清初亞細亞圖

●清初滿洲圖

第六圖

●現代亞細亞圖

●露國中央亞細亞侵略圖

●露國極東侵略圖

●佛國印度支那侵略圖

目次終

女子教育新編東洋史

文學博士 中山久四郎著

第一章 東洋史の意義

●東洋史上の地と人と 私共はこれより支那を中心とする東洋諸國の歴史を學びます。支那及び印度などの東洋史上の諸國は、我が國と同じく廣い意義の東洋にあつて、漢民族・印度民族などがそこにあらはれて、幾多の國を立て、いろくの事業をなし、さまざまの文化を造つて、世界の進歩に貢獻し、また昔より我が國と交通して、文化上の關係が深いのみでなく、現代の國際上の關係も、また極めて深く、その諸國の沿革と、文化の由來や、性質を知ること、は、我が

國民にとつて甚だ大切であり、國史を明らかにするためにも、大いに有益な參考となるものであります。

○ 國體の相異 さて既に國史を學んだものが、今より外國史を學ぶこととなつたのにつけて、特に注意すべきことがあります。それは我が日本と外國との大きな相異の點であります。

我が國はいふまでもなく、肇國以來君臣の名分が一定し、萬世一系の天皇を奉戴する正大尊嚴なる國體の國であります。

しかるに、支那その他の諸外國は、昔よりしばしば主權者の革命が起り、その國號もたび／＼かはりました。

我が國と諸外國とは、かやうに國體に大きな相異のあることは、外國史を學ぶにつけて、第一に心得ておくべきことであります。

○ 歴史の意味 歴史は、まづ演劇のやうなものであります。その土地は舞臺で、その土地にあらはれてゐる／＼な業績を遺した人種

地人の關係

人と時と處
因果と影響

民族は、役者にたとへられます。又歴史の意義を簡單にいへば、何時誰が何處で何事をなしたかといふことを明らかにするもので、即ち人と時と處の三つが大切であります。や／＼精しくいふと、その出來事の原因、結果及び影響などを明らかにしなければなりません。

第二章 上代の支那及び印度

第一節 上代の支那

○ 支那建國の初め さて支那の歴史の舞臺は後には甚だ廣くなつたが、初めは北支那の黄河の流域の一部でありました。またその役者も多くあつたが、その主人役ともいふべきものは、漢民族であります。漢民族が何時何處から來たかといふことは、今なほ明らかでありませんが、今より約五千年前に支那に入り、黄河のほとりに住み、多くの部落をなしてゐたといひ、黄帝といふ英雄が出て之

漢民族

黄帝

堯・舜二帝

二十四孝の第一

禹の治水

*皇紀前一〇〇頃、西紀前一七六〇頃

革命の始め

桀・紂二王

*皇紀前四六〇頃、西紀前一二二〇頃

を統一し、始めて舟車を作り、音楽を定め、文字を製し、また養蠶を始めたさうです。その後堯舜二帝相ついで出で、よく天下を治め、聖天子として後の人に尊ばれました。

帝舜は孝行の人で、支那の二十四孝の第一として名高い。支那は昔から孝を重んじ、孝は百行の本といはれてゐるほどであります。

●夏の世 堯舜の世に、黄河の洪水があり、人民が大いに苦しみました。禹は治水に成功し、帝舜について天子となり、國を夏と號しました。堯舜二帝及び禹王はともに今の山西省内に都しました。

禹の崩後、其の子啓ついで王となり、王位の世襲がこゝに始まり、其の後桀王に至り、惡政を行つたので、殷の湯王に滅されました。

●殷の世 湯王より六百年ばかりたつて、紂王に至り、また惡政を行つたので、周の武王に滅されました。その末路は、まことに前代に似てをります。斯の如く支那は上古から王朝の革命があつて、これ

和漢(日支)の國體の相異

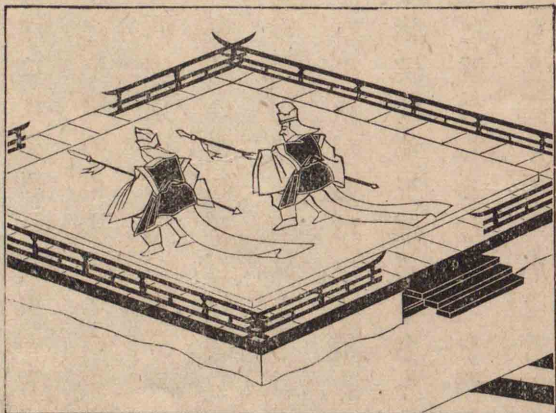
文・武二王と周初の良母賢妻

封建制度

伯夷・叔齊の清節

が萬世一系の我が國體と大いに異なる所であります。

●周の盛衰 周の武王の父文王は、殷末の大諸侯で、善政を行ひ人望がありました。文王の母太任と王妃太姒は、ともに婦徳高き人で、文武二王は善良な家庭に養はれました。武王は殷に代つた後、今の長安(陝西)の西に都し、一族功臣を封じて諸侯とし、公侯伯子男の五爵を設けました。



武王の殷を伐つたとき、武王の勝利を祈る時、武王の夫人太姒が舞を奏した。この時、伯夷、叔齊は清節を顯した。

殷周革命の際、伯夷、叔齊といふ二義人がありました。武王出陣の時、臣として君をうつ不正を諫めたがきかれず、天下既に周の世となるや、周につかへることを恥ぢて、山に入り、蕨をとり、終に餓死したといひ傳へられ、その清く且つ堅い節操は後世に名高いものであります。

周公の輔佐

*皇紀前一〇〇、
西紀前七七〇
周の東遷と西周
及び東周

尊王攘夷
五霸の第一



周成王を輔るる

武王の死後、その弟周公は幼主成王(武子)を輔けてます。善政を行ひ、天下よく治まり、文化も次第に進みました。成王の後、數世を経て王威漸く衰へ、第十二世の幽王は、西方の異民族に攻め殺され、その子平王はこれを恐れて、東の方洛邑(河南)に遷りました。之を周の東遷といひ、東遷の前後によつて周を西周・東周の二つに分けます。

春秋五霸 周の東遷の後、約三百年間を春秋の世といひます。この間、周の王室はますます衰へ、諸侯は互に相争ひ、夷狄がしばしば侵入しました。よつて有力な諸侯は、尊王攘夷を名とし、王命をかりて、小諸侯に號令しました。之を覇者といひ、五霸ありましたが、齊の桓公が最も名高く、その名臣管仲を用

經濟と道德

戰國時代

ひて覇業に成功しました。桓公の時は、我が神武天皇即位紀元前後の頃であります。

管仲は春秋時代第一の政治家で、よく富と教、又は經濟と道德の關係に注意して、倉廩(倉庫)實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る。といふ政策を守りました。

戰國七雄 春秋の後、二百年ばかりの間を戰國の世といひます。この間、春秋時代の諸侯の數が減少して、秦・楚・齊・燕・韓・魏・趙の七大國の君は自ら王と稱して、周王は尊嚴を失ひ、七國互に競争しました。その中西方の秦は最も強く、東方の六國に迫らんとする勢があり



古代支那戰士の圖 (後漢時代彫刻の山東省武梁室石像)

遠交近攻の策

*皇紀四一二、孝
靈天皇御代、西
紀前二四九

秦の統一

ました。そこで六國同盟の策がたてられました。秦も努力して六國の連合を破り、且つ遠交近攻の策を立てて、次第に六國を弱め、遂に周を滅し、秦王政に至り、盡く六國を滅して、天下を統一しました。

周(三十八世八) 西周(三百五十二年)
東周(五百二十二年)

春秋の世(約三百
年間)
戦國の世(約二百
年間)

父母兄弟子の五
教
學術の根と芽と
花

⑦ 教育・學術 支那の教育の始めは、堯舜の頃にあつて、帝舜は、父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝といふ五教を明らかにして、國民に教へ、夏殷・周の三代には各學校の制度がありました。かくて支那古代の學術は、堯舜の頃にその根をうる、夏殷の世に芽を出し、周に至つては花を開いて美を競ふといふべきで、春秋戦國の世は亂世でありましたけれども、また一方には道を説いて、天下を平和ならしめようとするものもあらはれ、且つ列國ともに人材を招いたので、

*皇紀一〇九、綏
靖天皇御代、西
紀前五五二
孔子の學徳・趣
味及び意志

學者論客競ひ起り、互に世を救ひ身を立てんことを力めました。その中最も名高いのは聖人孔子であります。

⑧ 孔子

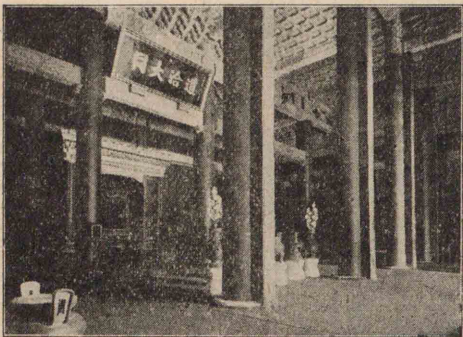
孔子(名は丘、字は仲尼)

は春秋時代の末、魯(山東省の封國)に生れ、學徳の高

儒教
正しい政治即ち
道徳による政治

孟子

論語の傳來



北京大成殿(正面)孔子神位の前欄の扁
額「道洽大同」の四字は國民六年總統黎元洪の題りな字

うになりました。

孔子の師弟及び孔子と時人の問答などを輯めた論語は、我が應神

天皇の時、百濟の王仁がこれを本邦に傳へました。これは日本歴史で學んだとほりであります(孔子の歿後約七百六十年)。

孔子

かみつ世のかしこき人をのりとして立てし教へぞ今も朽せぬ
あめの下めぐりつくして萬代の道の親ともなりしきみかな

東久世通禮
税所敦子

孟母三遷の教

孟母斷機の教

孟子の母は有名な賢母でありました。その家は初め墓地に近く、孟子は遊戯にも葬式のまねをしましたので、母は善い住處でないとして、商家の傍に移り、更に學校の傍に遷りました。之を孟母三遷の教といひます。又孟子の少時、讀書中母は機織をしてゐましたが、孟子の讀書を中止するや、母は刀を以てその織物を斷ちきり、學問の中止すべからざるを諭しました。之を孟母斷機の教といひます。

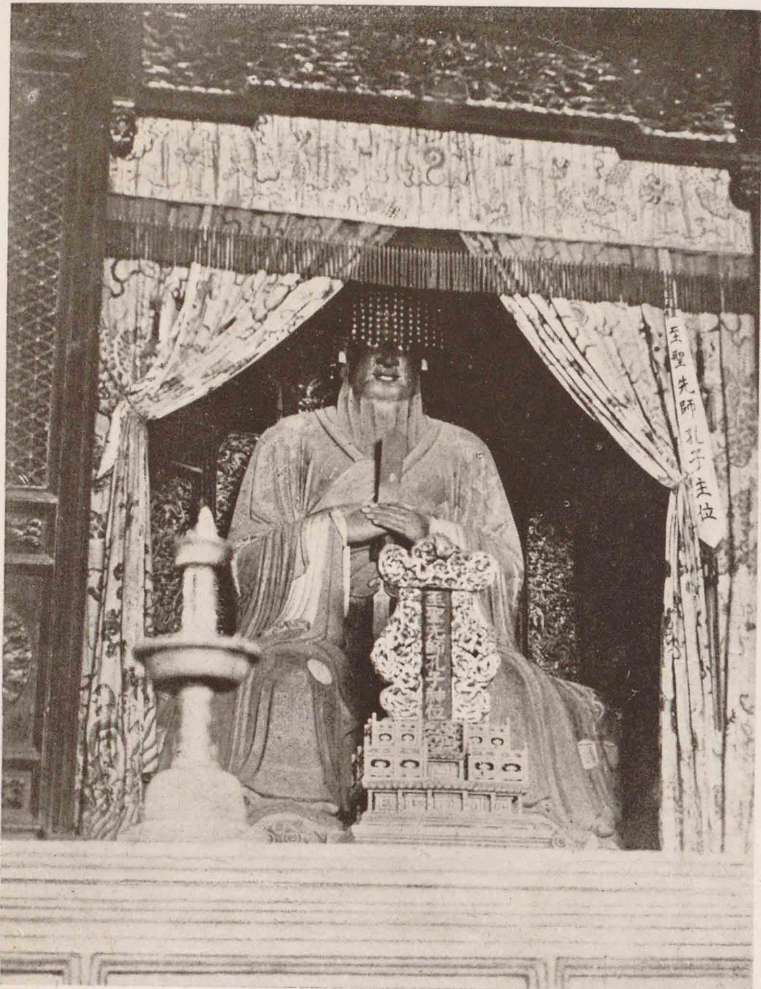
孟母

心して遷しうゑずばなでしこの花も千とせににははざらまし
たちねの子のため斷ちしし織ややがて心の錦なるらん

黒田清綱
税所敦子

四書と我が國民道徳

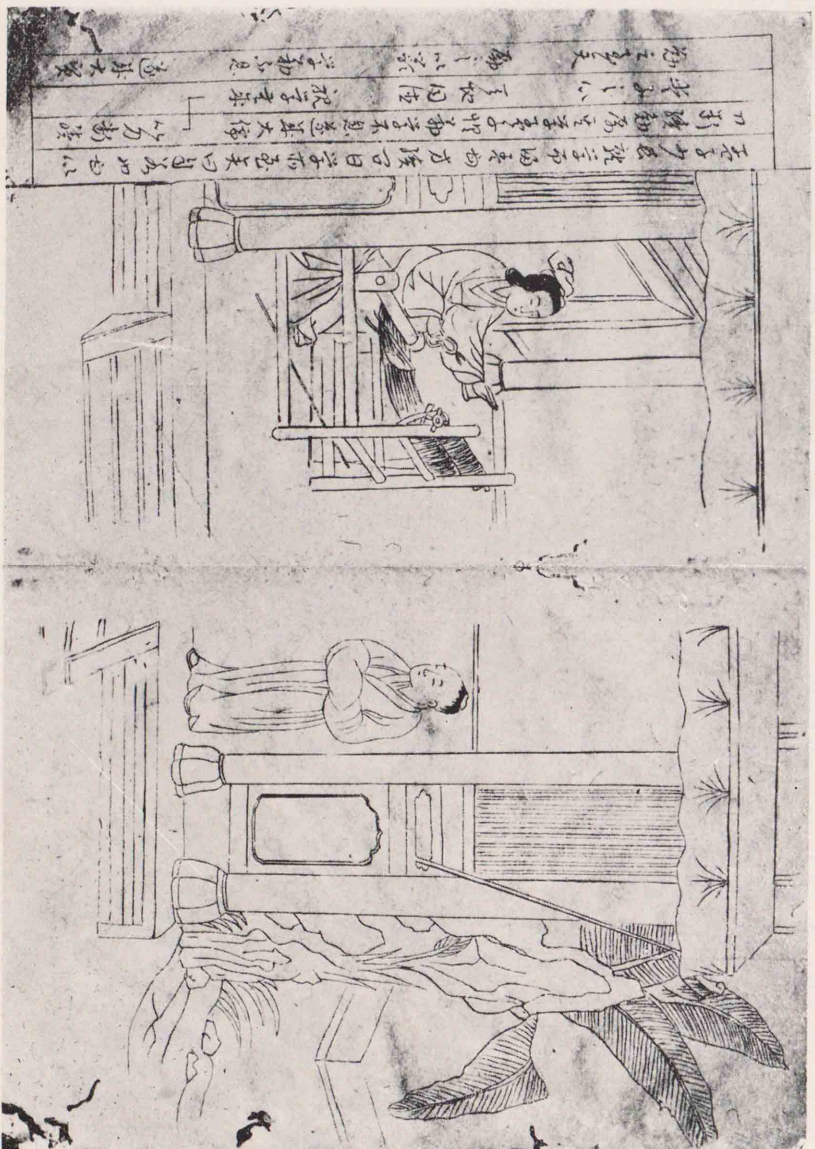
孟子の著した書物を孟子といひ、論語及び大學中庸と併せて、之を四書といひ、儒教の大切な古典として、我が國に於ても昔からよく行はれ、大いに國民道徳の發達に役立ちました。



孔子の像

孔子の像

この像は山東省曲阜縣城内にある大成殿(孔子を祭る殿堂)に安置されてあるもので、東魏の興和年中(今より大約一千四百年前)に作つたものとして傳へられてゐる。



孟母斷機の圖

孟母斷機の圖

これは支那の明代に編輯された孟子全圖（孟子全圖）に孟子繪本（孟子繪本）にのせてある孟母斷機の繪をうつしたものであります。

孔孟と老莊
道家より道教

諸子百家

印度の四種姓

● 諸子百家 儒教の孔孟二子が道德や禮樂を重んずるのに對して、老子や莊子は、反動的に自然無爲の道を説きました。この一派を道家といひ、儒教と共に世に行はれ、後世の道教は、この派の説によつてつくり出されたのであります。その他、いろ／＼の學派がならび起り、これ等を總稱して諸子百家といひ、後世の支那の思想文學は多くこれより流れ出てゐます。

第二節 上代の印度

● 上代印度 亞細亞大陸の南方に印度といふ大半島があります。印度は支那とともに世界の舊國の一つで、また東洋文化の一發源地（發源地）であります。今より四千餘年前にアールリヤ人種（Aryans）の一派は、中央亞細亞から南に下つて印度に入り、やがてその國民は、僧族、王族、平民、奴隸の四種姓に分れました。當時の宗教は、ブラー（Brahmanism）マン教といひ、四

衆生の希望

世界三聖の一

*皇紀九七頃、綏
靖天皇御代、西
紀前五六四頃に
誕生、孔子と殆
ど同代なり

釋迦牟尼

*支那の戦國の末
の頃
阿育王の熱心

種姓の階級があつて、僧族の特權を認めましたから、僧族はつひに勢力を得て、他の三階級はその壓制に苦しみ、世を救ふ聖人が出て、宗教を革新せんことを希望してゐました。

◎佛教の興起 この時に當り、世界三大聖人の一人たる釋迦シヤカが出て世を救ひ佛教を開きました。釋迦の本名は悉達シツダツクといひ、中印度カピラ國王の王子として生れましたが、衆生を濟度サイドしようといふ尊い理想を立て、難行苦學キヤウを積んで、つひに釋迦牟尼ムニと尊稱され、佛教を創ハジめ、一切平等を説き、慈悲博愛を行ふべきことを教へました。そこでこれまで苦しんで居たものは、皆喜んでこの新しい宗教に歸依キしました。

その後、二百餘年を経て、中印度のマガダ國マガダに阿育王アソカが出て、深く佛教を信じ、その傳播に熱心であつたので、佛教は盛に行はれ、印度よりの外の諸國にも弘ヒロまるやうになりました。



釋迦圖

(藏寺福東都京)

(筆玄道吳の唐傳)



釋尊大悟成佛の靈場の高塔

釋迦圖

支那の唐の世、文物大に興り、圖書の術も頗る發展した。吳道玄は唐の諸大家の一人で、字は道子といひ、吳道子の名によつて知られてゐる。玄宗時代の人。人物畫に長じ、佛寺等の壁畫を作つたので名高し。本圖は、京都東福寺に藏められ、吳道玄の筆と傳へられてゐる。

釋尊大悟成佛の靈場

この靈場は、今の印度のベンガル州のガヤ市の南方三里許の佛陀迦耶(Buddha-Gaya)にある。釋尊の靈場は印度に多いけれども、これが第一である。釋尊は此靈場の菩提樹下の金剛座に端坐し、沈思黙念の末廓然として大悟し、佛陀となられた。圖中の高塔は此古蹟に建立したもので、其起源は遠く二千一百餘年前の阿育王(釋尊死後二百年許)の時にあつて、近世緬甸王及び英國人の修復再興したものである。高さ百七十尺許、基址の一辺五十尺許である。因みにいふ釋尊大悟の時は其年三十五歳の二月八日、四月八日は釋尊の誕生日なりと傳へられてゐる。釋迦もまたあみだもとは人ぞかし我も形は人にあらずや

一 休 和 尙

第三章 秦・漢時代

第一節 秦・漢の興亡

中央集權の政
皇帝尊稱の始め
萬里の長城
支那國號の起源

● 秦の始皇帝 秦王政は天下統一の後、自ら始皇帝シクワウテイと稱し、制度を改め、周の世の封建の制を廢して、郡縣の制となし、國都咸陽カンヤウ(陝西)に壯大な宮殿を築き、大いに中央集權の政を行ひました。皇帝といふ尊稱も、始皇帝に始まつたのであります。帝はまた戰國以來しばしば支那に侵入した匈奴キョウゴといふ北狄テキを撃ち破り、且つ北邊に萬里の長城を増築し、南は今の安南地方まで征服しました。されば秦の威名遠く振ひ、諸外國は秦の名を訛ナマつて支那と呼ぶやうになりました。かくて帝の内外の事業は盛大であつたが、その政治が甚だ嚴しく、且つあらかつたので、これを非難するものがありました。

● 秦の滅亡 帝の死後、その子二世皇帝の世となるや、叛亂を起す

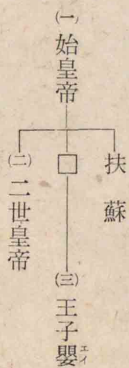
項劉二雄

*皇紀四五五、
元天皇御代、
紀前二〇六
西
理想の幻滅

もの多く、中にも江東(江蘇省)に起つた項羽カウウと沛(江蘇省)に起つた劉邦リウハツとは、最も有力な英雄で、共に秦を攻め、劉邦まづ咸陽を陥れて、秦を滅*しました。かくて始皇帝が二世三世とかぞへて、萬世に至り、之を無窮キユウに傳へんと大言した秦の天下も、始皇帝の死後僅に三年にして亡びました。

我が應神天皇の御代、秦の後と稱するものが朝鮮より歸化し、秦氏となり、蠶織などの方面にはたらいて功績がありました。

秦の系圖



漢の三傑

漢の高祖 秦の亡んだ後、劉邦と項羽は、兩雄並び立たずの諺コトワザにもれず、互に天下を争つたが、劉邦は蕭何シヤウカ、張良、韓信の三傑を善用し

*皇紀四五九、
元天皇御代、
西
孝
紀前二〇二

漢土・漢人

漢初の良君

武帝の諡



漢の高祖(晩笑堂畫傳)

て、項羽を滅し、自ら帝位に即*き、長安(陝西省)に都しました。これが即ち漢の高祖であります。高祖は實に一平民より起つて天子となつた英雄であります。漢王朝は、多年支那を治めて、支那帝國成立の基を固め、漢土及び

漢人の名は、つひに支那及び支那人の別名となりました。
四 文帝・景帝 高祖の死後、惠帝を経て、第三世の文帝は、仁愛儉約の良君として名高く、その子景帝の時も概ガイして天下よく治まり、人民も富み國庫も豊ユクカとなりました。

五 武帝の功業 景帝の子武帝は、雄才大略があつて、前代豊富の後をうけて位につき、在位五十四年の久しきに及び、内治外交ともに大いに振ひ、特にその諡オクリナの示すが如く、外征の武功にあらはれてゐ

箕子と朝鮮

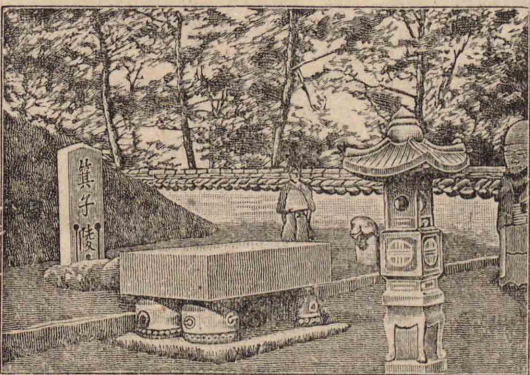
*皇紀五五三、開
化天皇御代、西
紀前一〇八
四郡と三韓
和・韓・漢三土の
交通

北方の匈奴と南
方の支那
祖先と民族の爲
の出兵

ます。

⑥古朝鮮 古朝鮮は、周の初めに殷の王族箕子の建てた國であります。

箕氏は古朝鮮の君たること、九百餘年、漢の初めに至り、燕の人衛滿が箕氏に代つて朝鮮王となりましたが、武帝は衛滿の孫を滅して、その地を漢の四郡としました。時に半島の南部は、馬韓、辰韓、弁韓の三大部に分れ、早くから本邦と通じてゐましたので、本邦及び三韓と漢との交通も亦従つて開けました。



(壤平鮮朝) 陵の子箕

⑦匈奴 當時北方の匈奴は支那の大敵で、漢の高祖も親征して失敗しました。よつて武帝は匈奴を撃ちはらつて、祖先と民族の恥を雪がんとし、しばしば兵を出して、之を撃ち破りました。この匈奴征

漢の勢力範圍



圖略鮮朝代古

伐と關係してゐる西域征伐のことは後にゆづります。

⑧王莽の篡奪 漢の全盛は武帝及びその次の二代で、その勢力は、東は朝鮮から西は天山南路に達し、北は内蒙古より南は安南に及んだ。然るに武帝より九十餘年を経た頃、外戚の一族王莽は遂に帝位を奪つて國

を新と號し、漢は一時中絶しました。

⑨漢の再興 されど、人心は未だ漢を去らないのみならず、王莽の

政治が良くなかつたので不平の群雄は四方に起り、王莽は忽ち敗れ、群雄中、漢の王族劉秀は衆に推されて天子となり、洛陽(周邑)に都し、群雄を平定して、天下を一統しました。漢は一時の中絶によつて

新の國運僅に十
五年
*皇紀六九六、垂
仁天皇御代、西
紀三六

*皇紀六六八、垂
仁天皇御代、西
紀八

前漢と後漢

前後兩漢に分れ、劉秀は即ち後漢の光武帝と呼ばれます。

⑩ 後漢の盛衰 光武帝は専ら平和主義をとり、且つ節義の奨励を以て名高い。その子明帝、孫章帝も亦よく父祖の業をつぎ、漢の國運また盛となりました。

されど、第四世の和帝以後の諸帝、多くは幼弱で、政治は次第に悪化しましたので、節義を重んずる諸名士は、その弊害を除かうとして成らず、反つて種々の不幸にあひました。

楊震は後漢の一名士で、正直を以て名高い。かつて郡守となるや、ある夜、人あり金を贈り、夜中知る者なしといつて、金を受けるやうに勧めましたが、楊震は「天知、地知、子知、我知、何謂無知」といつてこれをしりぞけました。これを楊震の四知と云つて有名な話であります。

⑪ 後漢の滅亡 後漢は諸名士の不幸によつて、政治ますます衰へ、人心漸く亂を思ひ、賊徒諸方に起りました。是に於て或は賊を討ち、或は政治を改善するを名として、群雄相ついで起り、天下また亂世

諸名士の禍

楊震の四知

*皇紀八六八、應
神天皇御代

赤壁の戰

*皇紀八八〇、應
神天皇御代、西
紀二二〇

漢朝四百年

となりました。中にも曹操の勢特に強く、漢の王族である劉備及び江南の豪族孫權の聯合軍と赤壁(湖北)に戦つて敗れたが、つひに北支那を領し、その子曹丕に至り、後漢最後の獻帝を廢し、魏國を建て洛陽に都しました。かくて漢は前後併せて約四百年にして亡びました。

第二節 漢代の文化

儒學尊重

支那歴史の父

漢の二大歴史家

女誠の著者班昭
(曹大家)

① 學術 漢の武帝の時は、外征にも成功しましたが、學術も振ひ興り、帝は特に儒學を尊び、之を以て政治と教育の標準と定めました。また帝の時に司馬遷が出て、史記を著し、支那歴史の父といつてもよいやうになりました。後漢の世には班固が出て、漢書を著し、史記と漢書は後世修史の模範となりました。

班固の妹を班昭といひますが、文學に長じ、また婦徳を以てあらはれ、女誠といふ

漢字の諸體とその發展



班昭(曹大家)の像

書を作り、女子の修身書として、我が國にも用ひられました。班昭は後漢の第四世和帝の宮中に仕へ、皇后女官の教師となり、大家と尊稱され、世に之を曹大家曹氏に嫁したので、かくいはれます」といひます。

●漢字及び紙筆 漢字は周代以前に起り、大體西周の中頃迄の文字を古文といひ、西周の時、篆書の

紙と筆の發明及び精製

發明あり、秦に至り、又隸書の發明あり、その後楷行草の三體が起つた。文字を書くに、初めは竹木及び絹などを用ひたが、後漢に至り、麻布、樹皮の類から紙をつくることを發

篆書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈
隸書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈
楷書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈
行書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈
草書	山	水	魚	鳥	靜	淑	貞	烈

文字の變遷

明し、秦の時に精製せられた筆とともに大いに世人を益し、文化の普及と進歩を助けました。

道教の性質
儒・道・佛の三教

●道教 後漢の末に、道教が起りました。これは支那古來の民間信仰に、周代の老子・莊子の説を加味したもので、長生・幸福を求め、ために、道を行ひ、鬼神を祭ることをつとめた現世的宗教で、張良の後と稱する張道陵の開いたものであります。道教は、儒教及び文章に説く所の佛教とならんで支那の三教といはれます。

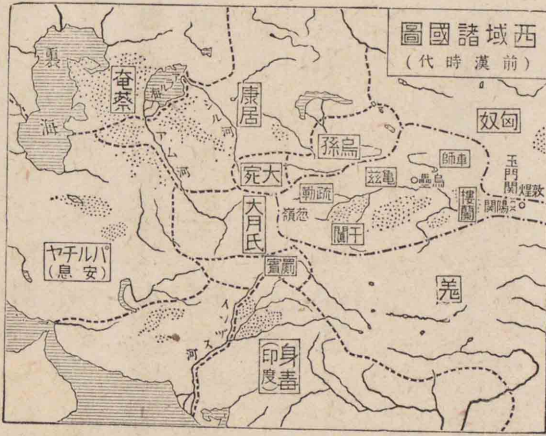
第三節 西域との交通 佛教の東傳

張騫の遠征

●漢と西域 西域とは匈奴の西邊と今の新疆省地方及びパミール高地以西の地方の總稱である。前漢の武帝が匈奴を征伐した頃、中央亞細亞に大月氏といふ國がありました。武帝はこれと同盟して、匈奴を挟み撃たうとして、張騫を大月氏に遣はしました。これか

西方物産の東傳
と支那絹の西傳

ら漢と西域諸國との交通始
めて開け、葡萄、苜蓿、石榴など
の西方の物産が次第に支那
に傳はり、又支那の絹絲は西



西域諸國圖

國方に傳はつた。後漢に至り、また大いに
圖匈奴を撃ち破り、また班超を遣はして
西域諸國を征服せしめました。班超は
西域に留ること三十年、大いに恩威を



希臘的影響的葡萄唐草の漢代青銅鏡(西清古鑑)

班超の功勞

班昭の兄

西域に施しました。また當時の大事事件は佛教の印度より東に傳は
つた事であります。班超は前にのべた班昭(一八九)の兄であります。

王女細君



ガンドラ式佛像

の烏孫といふ蠻國の國王に嫁いだが、言語は通ぜず、飲食・風俗も異なり、甚だ心さ
びしい思ひをしたといひます。

又その後武帝より三代目の元帝の時、宮女王昭君も國家のために、匈奴の大酋長
に嫁ぎ、異郷にその身を終り、その薄命は後の人に同情され、王昭君の事を畫に描
き、詩や歌に詠じたものが少くありません。

王昭君

カニシカ王の盡力

● 佛教の東流 文化の融合 上代の印度の一節にのべた阿育王の後また約三百年を経て、中亞細亞の大月氏國にカニシカ王が出て、また深く佛教に歸依して、その布教につとめたので、佛教は次第に東傳して天山南路にも傳はりました。而して天山南路の東方は後漢の領地であります。

*皇紀七二七、垂仁天皇御代、西紀六七。百濟より本邦に佛教を傳へたのは、是より約五百年後なり
佛教の支那傳來
支那・印度の文化的融合

後漢の明帝は西方に佛教あるを聞き、使者を大月氏に遣はして、佛典と高僧とを求め來らしめました。これより佛教は漸く支那に流行し、また朝鮮をへて本邦にも傳來して、東洋の一大宗教となりました。佛教東傳とともに、之に關聯せる藝術も傳はり、支那文化と印度文化との融合がこの頃より始まるやうになりました。

第四章 三國・兩晉南北朝時代

第一節 三國時代

蜀漢と吳の建國

● 三國の鼎立 第三章の中(一九)に、曹丕が後漢を倒して魏國をたてた事をのべましたが、その翌年劉備は成都(四川)に都して、帝位に即きました。これを蜀漢の昭烈帝といひます。ついで孫權もまた今の南京に都して、吳といふ國を立てました。

*應神天皇御代の間
諸葛孔明の忠誠武略

かくて支那の天下は三分して、魏は北支那に、吳は南支那の東部に、蜀はその西部によつて、鼎立の形をなし相争ふこと四十年許り、蜀漢の地は最も小さかつたが、諸葛亮(孔明)の忠武によつて、よく他の二國と並び立つことを得ました。昭烈帝の死後、諸葛亮は幼主を輔け、必ず漢朝を興復せんと欲して、魏を伐つたが、惜むべし志を得ずして陣中に歿し、蜀漢はつひに魏に滅されました。

草廬三顧
君臣水魚の交

諸葛亮は、もと亂世を避けて、田野を耕し、立身出世を求めなかつたが、臥龍の名は、天下識者の間に高いので、劉備は三度その草廬を訪問し、誠意を表しました。孔明はこれに感激して、つひにその臣となり、君臣の情、極めてこまやかで、水魚の交と

出師の表は忠誠の結晶

死せる諸葛生ける仲達を走らす

*皇紀九四〇、應神天皇御代、西紀二八〇



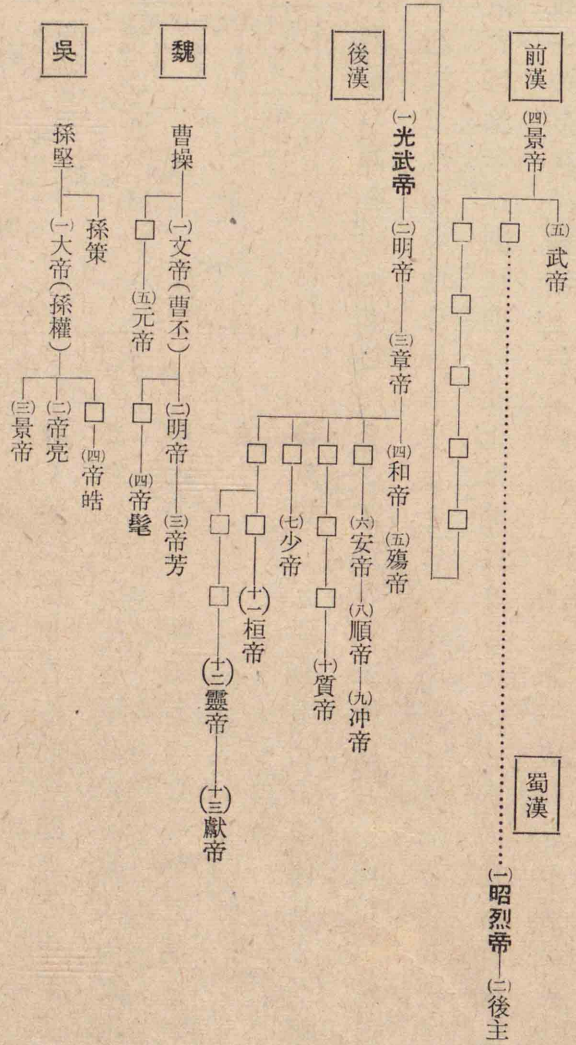
(像畫堂笑晚)亮 葛 諸

は「死諸葛走生仲達」といつたといはれてゐます。仲達とは魏の將司馬懿の字であります。

明治天皇御製 龍の臥す岡のしらゆきふみわけて草の塵を訪ふ人や誰
昭憲皇太后御歌 雪わけし深き心に臥す龍も今はと空に思ひたちけむ

● 晉の統一 既にして魏もまたその臣司馬炎に帝位をうばはれて亡び、司馬炎は更に吳を併せて天下を統一し、洛陽に都しました。これが西晉の武帝であります。

後漢と三國の系圖



第二節 兩晉・南北朝時代

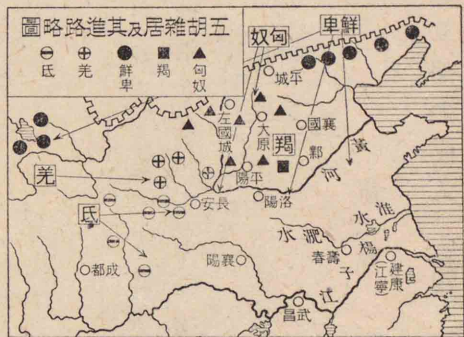
● 五胡の侵入 前にのべた如く、西晉の武帝は、支那を統一したけ

清談の流行
*清談とは禮法を
輕んじ、世務を
いやしみ、専ら
空理を談ずるを
いふ

五胡の侵入

晉の南遷

北部の混亂と南
部の文弱



五胡雜居及其進路略圖

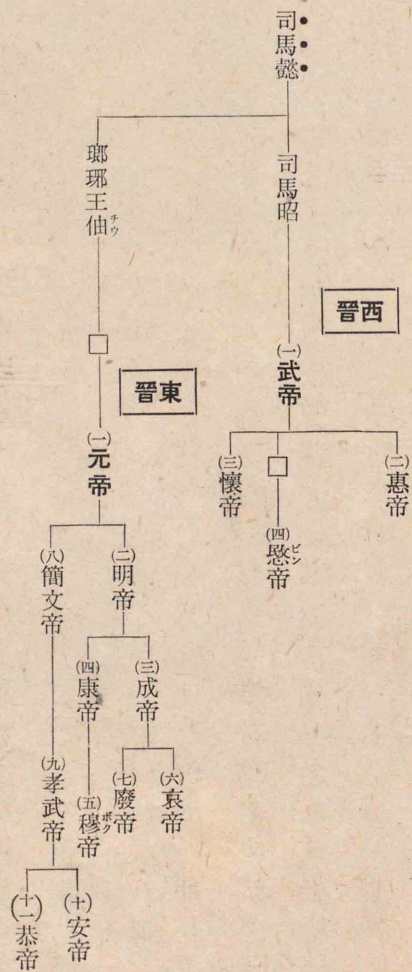
れども、天下は平和ならず、士人は清談に
ふけてつて國家を憂へず、外には北方及び
西方から支那に侵入した異民族の勢が
漸く盛になり、晉は之を防ぐことができ
ませんでした。是等の異種族は匈奴、羯、鮮
卑、氐、羌の五種であつたので五胡といひ
ます。

東晉 五胡の中、北方の匈奴まづ起つ

て、洛陽の都を陥れました。そこで晉の一王族は、今の南京に都して、
大體揚子江南の地を保ちました。これから後を東晉といひます。
東晉百餘年の間江南の文化は開けましたが、支那の北部は、混亂不
統一の狀多く、前秦といふ國は、一時江北を一統し、その勢が甚だ盛
でありましたが、忽ち衰へて、東晉は弱いながら、南方にその國を續

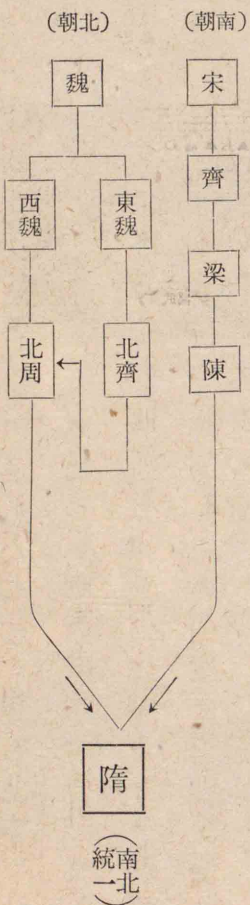
けました。

晉の系圖



南北朝

南方の東晉は、つひに内亂のために亡び、宋がこれに代



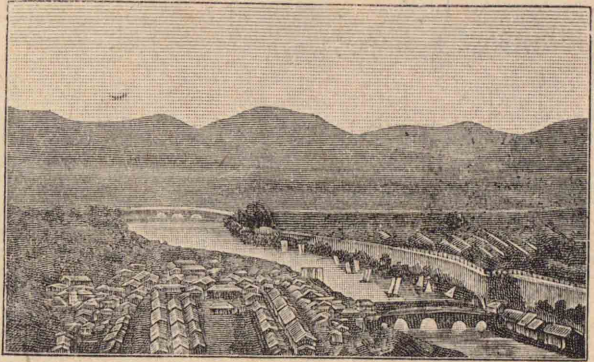
東晉と宋の交替
後魏の統一
*皇紀一〇八〇、
允恭天皇御代、
西紀四二〇

*皇紀一〇九九
允恭天皇御代、
西紀四三九
南北對立

六朝時代

文藝榮えて諸名
家出づ

詩・書・畫の三代
表者



南京の風景(近世)

した。詩人では陶淵明、書家では王羲之、畫家では顧愷之などが特に名高くあります。

陶淵明は東晉より宋にかけて節義を以てあらはれ、また田園的詩人として有名

りました。これに對し北方では後魏が前秦について諸國を併合しました。そこで支那は南北の二朝となり、約百五十年を經過し、その間度々王朝が變りました。
④ 六朝文化 南方の四朝即ち宋・齊・梁・陳は三國時代の吳と東晉の二朝と同じく、今の南京に都したので、これを總稱して六朝といひます。

六朝の諸國は、強國ではなかつたけれども、文藝はなかく、進歩し、諸名家が生まれ、詩人では陶淵明、書家では王羲之、畫家では顧愷之などが特に



出其言善千里應之荀達斯義
同衾以親

女史箴圖

女史箴圖(顧愷之筆と傳ふ)

女史箴とは西晉の張華が女の誠を説いた小品文で、その詞を顧愷之の畫餘白に書いてあるのである。この畫は清朝の秘府より出て英國博物館の珍藏となつたものである。

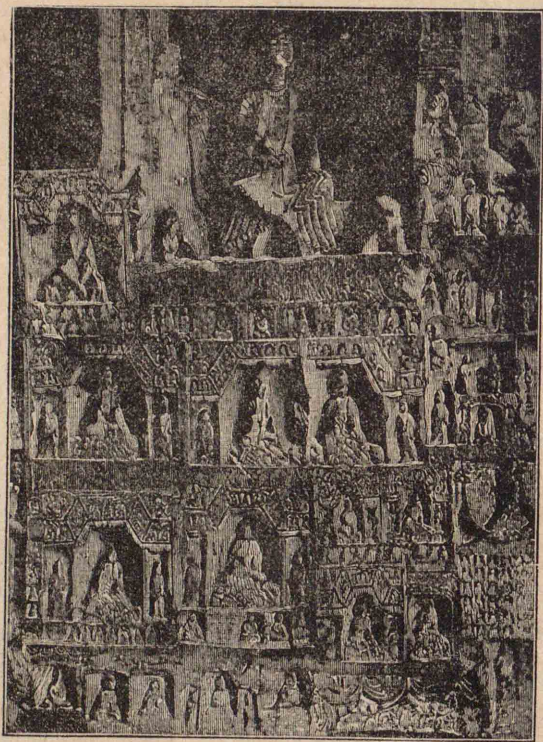
であります。王羲之の書風は早く我が國に傳はり、昔から我が國の書家にも尊ばれてゐます。顧愷之は人物風俗畫にすぐれてゐました。

⑤ 佛教の流行 晉

より南北朝に至り、佛教は大いに流行しました。南朝第三

梁の武帝の佛教信仰

はる 佛教益、東に傳



佛石の門龍の代時魏後近附陽洛省南河

の梁の武帝(武烈繼體安閑宣化)は特に深く佛教を信仰し、自ら三寶奴と稱しました。この佛教流行の勢は獨り支那に止まらず、支那より東に及び、朝鮮半島の高句麗は、佛教を前秦より受け、また之を新羅に傳へ、百濟は東晉より受け、更に之を本邦に傳へました。

法顯の入竺

達磨大師と禪宗



達磨

晉より南北朝の間、東西諸名僧の往來があり、東晉の末、支那の僧法顯は、陸路を経て印度に往き、海路より支那に歸り、往復十二年。初め同行十餘人、歸るに及んで法顯一人のみでありました。これが支那僧が印度に入るの初めであります。

又南天竺の達磨大師は梁の武帝の時海路支那に來り、禪宗を開きました。

第五章 隋・唐時代

好運の楊堅

*皇紀一二四九、
崇峻天皇御代、
西紀五八九
南北朝の統一
北強と南弱

●隋の統一 北朝の北周の外戚楊堅といふものは、運よくして丞相の職にあること僅に九月にして、つひに帝位をうばひ、隋といふ王朝をたて、ついで南征して陳を滅したので、五胡の侵入以後約三百年で、漢民族また統一されました。

之を要するに、南北朝の間、南北互に對立してゐましたが、柔弱な南

北朝の勝利

文帝の勤儉

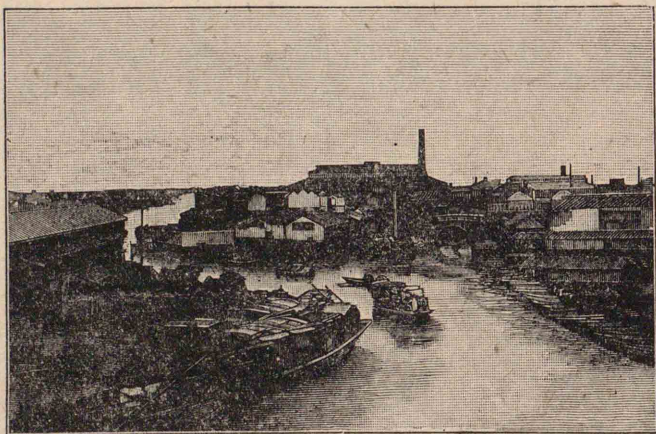
民力の復興

煬帝の豪奢

*皇紀一二六七、
西紀六〇七
日本と支那との
修交の始め
運河の利益

人は到底剛強なる北人に敵せず、北朝系統の隋は、よく天下を一統して長安に都したのであります。隋の文帝は勤儉で、國民の休養をはかつたので、多年の亂世に疲れた漢民族の力も漸く復興して、又もや大發展をなさんとするやうになりました。

●隋の煬帝 文帝の子煬帝は、豪奢を好んで、宮殿を造り、運河を開き、また連りに遠征を企てて國威を輝かさうとしました。我が推古天皇の御代に小野妹子を遣はして、交を修めたまふたのは、この煬帝の世であります。煬帝は巡遊などの爲に運河を用ひたけれども、運河はこれより後、



支那の運河

*皇紀一二七八、
推古天皇御代、
西紀六一八、
唐の高祖

秦・漢と隋・唐と
の比較

*太宗元年は推古
天皇三十五年、
西紀六二七

太宗貞觀の治

濟世安民の人相
三鏡の教

南北の交通を助けて利益を遺しました。

③ 隋の滅亡 すでにして煬帝は東方の高句麗をうつて再び失敗するや、國民はつひに叛し、群雄四方に起りました。中にも李淵は次子李世民と共に、兵をおこして、遂に帝位に即き、長安に都しました。之を唐の高祖といひます。隋は三十七年にして亡び、國運の短きこと、恰も約八百年前の秦の如く、隋の次

隋の系圖

〔一〕高祖文帝 〔二〕煬帝 〔三〕恭帝 の唐の盛にして、國運の長きことは、恰も秦の次の漢のやうであります。

④ 唐の太宗 高祖について立つた唐の太宗は非常の英主で、文武の名臣また多く出て、帝を輔けたので、天下よく治まり、國威四方に輝き、時の年號によつて、貞觀の治とよばれました。

太宗は、その幼少の時世を濟ひ、民を安んずるの人相があつたと、いふので、世民と名づけられました。帝は修身治國に注意し、銅を以て鏡となさば、衣冠を正すべし。

古を以て鏡となさば、盛衰を見るべし。人を以て鏡となさば、得失を知るべし。といつたなど、その美言。善行は頗る多くあります。

三省・六部

縣令・刺史及び
巡察使
租・庸・調

⑤ 制度 唐の中央政府には、

尚書・中書門下の三省があつて、天下の大政を統べ、尚書省の下に吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部の六部があつて、政務を分擔しました。また天下を分ちて十道とし、道の下に州と縣とを置き、縣に令、州に刺史を置いて、民政を掌らしめ、道ごとに巡察使があつて之を監督しました。また税には租・庸・調の三種がありました。



(解像論聖)ふ賜に子太を範帝宗太

唐の制度は、支那後世の模範となつたのみならず、本邦古代の制度も、之を参考にしたほどでありました。しかし大寶令に於て、特に神祇官において太政官の上

日・支國體の相異

たらしめたのは、我が國の敬神思想に富めることをあらはし、唐制受容參考の中にも、十分我が國體を明らかにしてゐます。唐の舞樂もまた我が國に傳はりました。太平樂一名武昌樂は舞人銻をとつて舞ひ、武舞の一として名高く、萬歲樂は唐の宮中に養つてゐた鸚鵡が常に萬歲を唄ひしによつて出来たもので、やさしい舞であります。

六 外征 唐の初め、朝鮮には、高句麗・百濟・新羅の三國がありま

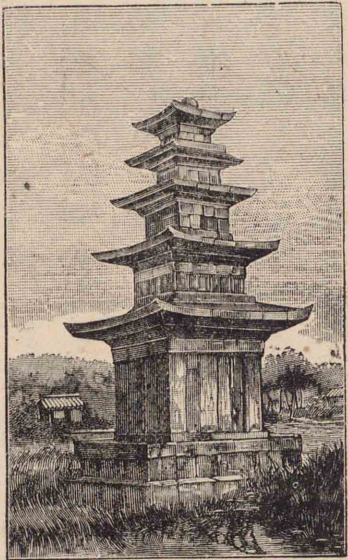
したが、高句麗・百濟は聯合して、新羅に當つたので、新羅は援を唐に請ひました。唐の太宗は高句麗を親征して、失敗したけれども、その子高宗の時、唐はつひに百濟を滅し、ついで高句麗を併せ、平壤に安東都護府を設けて、その地を統



萬歲樂部一(原圖四人)(上)武昌樂部一(原圖六人)(下) (樂舞圖說)

*皇紀一三二三、
天智天皇即位前
五年、西紀六六
三
*皇紀一三二八、
天智天皇即位の
年、西紀六六八

百濟・高句麗の
滅亡
安東都護府
新羅の一統



大 唐 平 百 濟 國 碑 塔
(朝鮮忠清南道扶餘近附)

べました。新羅はよく唐に事へて國を保ち、後には殆ど半島を一統して、二百年許りつづきました。

唐の武功は朝鮮半島の一面に止まらず、太宗・高宗の時、或は蒙古より中亞地方までをも領せる突厥といふ強敵を破り、或は今の西藏を伐ち、よつて遠く印度に通じ、或は威を南海諸國に示したので、唐の勢力の及ぶ所甚だ廣大となり、漢民族は大いに發展しました。

七 日本と唐 本邦は既に隋と交通しましたが、唐の世には、尙屢遣唐使を遣はし、僧侶學生を留學せしめて、その制度・文物を攝取參考したことは、恰も明治時代以來の歐米に於けるやうでありました。

本邦の古今と外
國文物

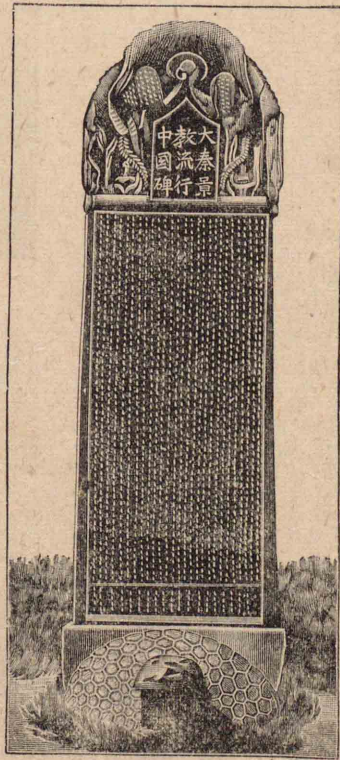
突厥その他の外
征
印度との交通
漢人の大發展

唐とアラビヤとの交通

回教と景教

玄奘の渡天
弘法・傳教兩大
師の入唐

⑧ 通商と諸外教 唐の世界的大帝國の建設は、東西の交通を促し、
 亞細亞大陸の西端にあるアラビヤ人も、印度洋を航海して、支那に
 象牙、犀角、胡椒、香料などを輸入しました。また東西交通の開くるや、西方諸國から回教、景教などの諸外國の宗教が唐に傳はりました。回教はアラビヤの宗教で、景教は基督教の一派であります。



(縣安長省西陝) 碑念記行流教景

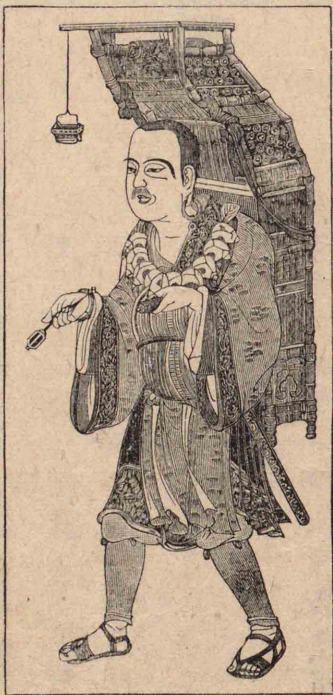
⑨ 佛教の流行 もろくのの新宗教が傳はると共に、從來の佛教も益々流行し、玄奘の如き印度旅行と佛典翻譯とに有名な高僧も出で、また唐の時、我が國よりは弘法・傳教の兩大師などの入唐あり、當時

武後の即位

彼の國に流行した佛教の諸派は概ね本邦に傳はりました。

⑩ 則天武后 唐の初期の盛な時にも、一つの不幸の事がありました。

した。第三世の高宗の皇后武氏は智略に富み、高宗の死後、政權をに



圖の天渡非玄

ぎり、つひに自ら帝位につき、國號を則周と改めました。これを則天武后といひます。かくて唐は一時中絶の狀となりましたが、久しからずして復興し、また有名なる玄宗の世となりました。



*皇紀一三七二、元明天皇和銅五年、奈良遷都の後二年に當る。西紀七一二

開元の治

④ 玄宗 玄宗は唐の第六世の君で、即位の後、大いに政治に勉勵したので、天下また太平となり、その年號によつて稱せられる開元の治は、太宗の貞觀の治にくらべられました。玄宗はまた四邊の要地に節度使をおき兵權を委ねて國境を守らしめたので、唐の國威また振ふやうになりました。

國亂れて忠臣出づ

*我が吉備眞備・阿倍仲麻呂の唐に留學せしは玄宗の世なり



(左)甫 杜 (右)白 李

然るに、玄宗も後には心がゆるんで、政を怠り、東北方面の節度使安祿山叛き、帝は一時長安の都を逃れました。しかし顏真卿、郭子儀等の忠臣が力を盡し、また賊に内紛があつたので、叛亂つひに平定しました。

⑤ 文藝の隆盛 唐は文學を重ん

李・杜・韓・柳の四大家

白氏文集

し、詩文の名家が多く出ました。その中玄宗の時の李白、杜甫の二人は詩人として最も名高く、更にその後四十年ばかりして、韓愈、柳宗元の二大文豪が出ました。又古來本邦の人に愛讀せられた白氏文集の作者たる白居易もその頃に出で、詩文の發達目ざましく、書畫音樂の藝術も進歩しました。

人皆有一癖、我癖在章句。
人ごとに一つの癖はあるものを我にはゆるせしきしまの道

(白居易)
(慈鎮和尚)

正月元旦
同 七日
三月三日
四月八日
五月五日
七月七日
同 十五日
九月九日
十二月大晦日

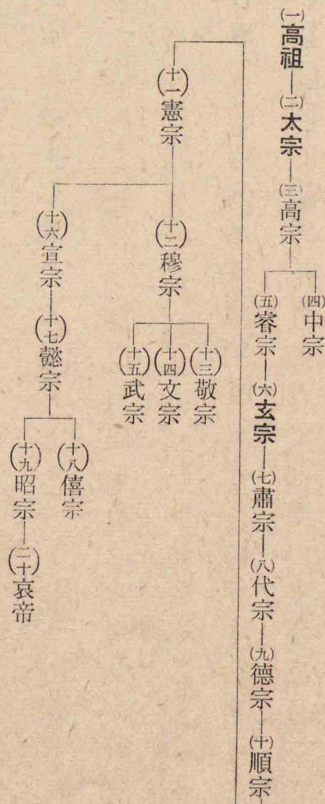
⑥ 年中行事 唐時代には、諸制度とともに、年中行事もとのひ、正月元旦の屠蘇酒の祝杯、正月七日の七菜の食事、三月三日の曲水の遊び、四月八日の灌佛の式、五月五日の端午の祭と菖蒲の湯、七月七日の七夕祭、同十五日の中元盂蘭盆の供養、九月九日の菊の酒、歳の終りの追儺の禳ひなどが行はれました。これ等の風俗は我が國にも傳はりました。

玄宗までとその後の唐

*皇紀一五六七、醍醐天皇御代、菅原道真の薨ぜしより四年の後、西紀九〇七

唐の滅亡 唐は玄宗に至るまで、既に百四十年ばかり経過し、玄宗以後なほ百五十年ほど続いたが、安祿山の亂後、その國勢前の如く盛ならず、節度使の亂暴、宦官の專横に加へて、財政の困難あり、唐はつひに大木の枯るるが如く亡びました。

唐の系圖



第六章 五代・宋時代

五代 唐の亡びし後、五十餘年の間、支那の中原には、梁・唐・晉・漢・周

内外の關係

遼の建國

渤海の興亡

*皇紀一五八六頃、醍醐天皇御代、西紀九二六頃

*皇紀一六二〇、村上天皇御代、西紀九六〇

の五代、忽ち興り忽ち亡びて、みな統一の功を成さず、紛争やむ時なく、文學は衰へ、教化も廢れました。

遼と渤海 漢人の内に弱い時は、異族外に興るのが原則のやうで、唐末衰弱の際より、今の遼河の上流地方を占領した契丹人の勢力漸く興り、五代の初め、その酋長は皇帝と稱し、滿洲及び内蒙古に互る領地を有し、五代の中頃には國號を改めて遼といひました。また渤海は今の滿洲人の祖先たる靺鞨族が唐の玄宗の初世に建てた國で、本邦及び唐と交通したが、新に興つた契丹のために撃ち滅されました。

宋の一統 國民は、もはや唐末及び五代八十餘年の紛争にあき、早く英主の統一政治を望みました。幸にして五代の末、趙匡胤といふ一英雄が衆に推されて、帝位に汴京(河南)に即きました。これが宋の太祖であります。

宋の太祖
武力の弱

太祖は平和を旨とし、國民の休養に注意したので、國民漸く安堵することができたけれども、武力はやゝ弱くなりました。太祖の弟太宗に至り、天下を統一しましたが、宋は建國の初期以來、常に外敵に苦しみ、その後つひに遼に多額の銀と絹とを贈つて平和を維持しました。

宋の仁君
先憂後樂の名言

次の仁宗は、宋代第一の仁君として名高く、また士は當に天下の憂に先ちて憂へ、天下の樂に後れて樂しむべし。といつて、天下の事に熱心な范仲淹、その他の名臣、大儒が少くなかつたけれども、外に對する勢は、なほ振ひませんでした。

王安石の新法

第六世の神宗に至り、深く之を憂へて、王安石を任用し、富國強兵の策をたてて、種々の新法を行はしめました。國民には反つて不便の點が多かつたので、司馬光等は之に反對し、是より新法、舊法の政争三十餘年に及び、政務は振はず國力ますます衰へました。

司馬光の反對
新舊二派の政争



司馬光

司馬光は幼少より明敏であつた。遊戯の間、一兒あやまつて水甕の中に陥つた。衆兒みな狼狽してゐる間に、司馬光は石をとり、水甕を撃ち碎いて、水とともに流れ出づる小兒を救つたといひます。

石とりてくださしかめの水よりや

惠の波は世にあふれけん

高崎 正風

女眞族の建國

*皇紀一七七五
鳥羽天皇御代、
西紀一一一五

遼の滅亡
強い金と弱い宋

④金の勃興

宋は遼といふ外敵ありしが上に、また滿洲より女眞族起り、その酋長アクダ(阿骨打)は遼の軍を破り、皇帝と稱し、會寧(滿洲省吉林)に都して國を金と號しました。これが金の太祖であります。遼の攻撃に苦しめる宋の徽宗は金起れりと聞き、ひそかに之と結んで、共に遼をうつつことを約し、宋は南から金は北から攻めて、つひに遼を滅したけれども、この役、金は宋人の弱いことを看破し、遼に

宋の國辱

*皇紀一七八七
崇徳天皇御代
西紀一二二七
*皇紀一七九八
崇徳天皇御代
北宋と南宋

不名譽な平和

宋・金の衰運

代つて宋に侵入して、その都を陥れ、徽宗父子を執へて北に還りま
した。そこで高宗が位に即きましたが、金の鋭鋒を揚子江南に避け、
つひに都を臨安(浙江)にさだめました。かくて高宗より以前を北宋
といひ、以後を南宋といひます。



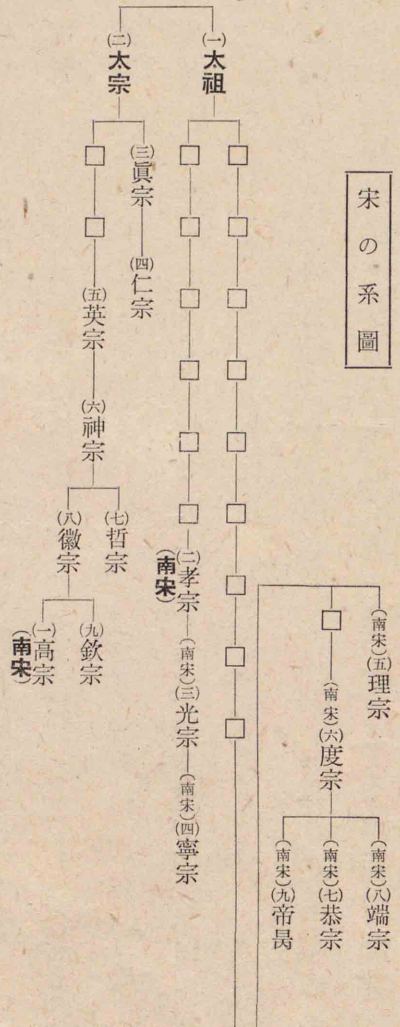
岳飛

岳飛等の主戦論者もありましたが、宰相秦檜は和議を唱へ、つひに歳貢を納めて金と和しました。しかし、金もこの後、漸く南方の文弱の風に化して、蠻勇の元氣を減じたので、南宋と

宋の特色は文なり

*皇紀一八六〇、
土御門天皇御代、源頼家の時、
西紀一二〇〇、
朱熹卒す、年七十一
朱子學

宋の系圖



朱子 (傳畫堂笑晚)

朱子學 宋の特色は武にあらざして、文にあります。漢・唐の儒者は、經書の字句の解釋に力めたが、宋の儒者は高尚なる哲學的研究に進み、南宋の朱熹に至つて、この新しき學風を大成しました。これを宋學または朱子學といつて、本邦にも傳

尊王賤霸の説

はり、特にその尊王賤霸の説は、我が國民にも深い感動を與へました。また朱子の論語・孟子・大學・中庸の四書その他の註釋は、今もなほ甚だ廣く我が國にも行はれてゐます。

陽氣發する處、金石もまた透る。精神一到、何事か成らざらん。

(朱子格言)

蘇東坡の文學

⑦文學・史學 宋は唐とともに文學の盛な時代で、詩文の名家が多く出ました。特に蘇東坡は詩文に兼ね長じて有名であります。歴史

司馬光の史學

の學も進歩し、司馬光の資治通鑑は最も名高い史籍であります。

禪宗の流行

⑧佛敎 佛敎もまた盛に行はれ、特に禪宗が最も盛で、美術とともに我が國に傳はりました。

繪畫の獎勵

⑨美術 美術も進歩し、徽宗は天子にして畫道にすぐれ、自ら花鳥などを畫き、また繪畫の獎勵に注意しました。

印刷文化

⑩印刷術 古代の書籍は皆筆寫したものでしたが、隋唐の頃から佛畫の印刷が始まり、五代を経て宋に至つては、その他の圖書も多



鳥 花 筆 宗 徽

喫茶の流行

く印刷され、大いに文化の普及を助けました。
② 喫茶 喫茶の風も、唐より宋にかけてますます流行し、他の文化とともに我が國にも傳はりました。

蒙古の根據地

偉大なる尊號

*皇紀一八六六、
土御門天皇御
代、源實朝の時、
西紀一二〇六

東矢の教訓

第七章 元 時代

● 成吉思汗 蒙古部は、外蒙古の黒龍江の上流のオーノン河地方に遊牧し、遼・金に屬してゐましたが、南宋の末に至り、その酋長にテムジンといふ英雄が出て諸部落を併せて成吉思汗(強盛なる君主の義)と號しました。

成吉思汗より十餘世の祖にアラン媛あり、五子の母でありました。五子の父既に死して、五子不和であつたとき、アラン媛は一日五子をならべ、一本の矢を與へて之を折らしめた所、皆容易に之を折りました。次に五本の矢を一束として折らしめた處、皆折ることができませんでした。母はよつて不和孤立の害と、共同一致の利を教へました。

成吉思汗の遠征

露西亞に侵入す

*皇紀一八八七、
後堀河天皇御
代、北條泰時
の時、西紀一二二
七

太祖の用兵神の
如し

金の滅亡

高麗の降服

拔都の歐洲侵入

成吉思汗はまづ南宋の西北邊にあつた西夏といふ小國を降し、ついで金を伐つてその黄河以北の地を略し、更に鋒を西に轉じて、中央亞細亞の諸國を征服し、また別に將を遣はして、今の露西亞に侵入せしめ、一旦東方に凱旋した後、つひに西夏を滅し、更に金を攻めようとして、陣中に病死しました。これを蒙古の太祖といひます。太祖はその一生に征服した地は、内外蒙古天山南北路支那の西北部と中亞細亞等に互り、實に世に稀なる英雄でありました。

◎太宗 太宗(名はオゴタイ)は父太祖について立ち、つひに金を滅しました。當時朝鮮半島には、五代の初期に起つた高麗といふ國があり、これまで宋遼金の三大國に對して巧にその國を維持してゐましたが、太宗はこれを攻め降し、東方に於ては、ただ弱い南宋が残つてゐることとなりました。

そこで太宗はさらに西方の大遠征を企て、拔都(太宗の子)を元帥とし

*皇紀一九〇〇年
頃、四條天皇御
代、西紀一二四
〇頃

欽察汗國

*皇紀一九二〇、
龜山天皇御即位
の年、北條時宗
の時、西紀一二
六〇

遷都と國號の新
定

宋の滅亡
*皇紀一九三九、
後宇多天皇御代
西紀一二七九
文天祥の忠義

て歐洲に侵入せしめました。拔都は先づ今の露西亞を攻め、遂に中部歐洲に攻め入つて、大いに歐洲諸國を恐れしめました。太宗の死を聞いて軍をかへし、露西亞の東南部に欽察汗國(キチカツカンの)を建てました。太宗より後も、蒙古軍は、或はまた遠く西亞細亞を遠征して、將に埃及に入らうとし、或は南方の雲南地方を攻め降して、益、その領地をひろめました。太祖について名高いのは、太祖の孫なる蒙古第五世の世祖忽必烈汗(フビライカンの)であります。

◎元の世祖 世祖は位につくや、これまで外蒙古にあつた都を今の北京に遷し、國號をたてて、元といひ、ついで南征して、宋の臨安の都を陥れました。宋はすでに甚しく衰微し、文天祥その他の勤王の士は、しきりに回復を圖りましたが、厓山(カイヤンの)の戰に敗れ、宋は太祖より三百二十年にして全く亡びました。

文天祥は博學で、官は丞相に至りました。忠義の心極めて深く、力を宋の回復に盡

正氣歌

したけれども、時利あらずして、終に元軍にとらへられ、土窟ツツの獄中にあること二年。その節操益堅く、つひに死につきました。その獄中の作なる正氣歌は、名高いもので、我が藤田東湖及び吉田松陰も、また之に和して、各正氣歌を作りました。

身はかくてひとやのうちにくちぬとも心ばかりはいかでけがさん

佐々木弘綱

東征の失敗

世祖はまた前後二回我が國にも侵略を試みましたが、大失敗に終つたことは、我が國史にあらはれてゐますから、今更之を説く必要もありません。世祖の地慾はなほこれに満足しないで、ジャバスマ

南征の成功

トラ等の南洋諸島をも征服しました。

空前の大國

④東西の交通 かくて蒙古は太祖より世祖に至るまで、凡そ八十年の間に亞歐の二大陸に跨る空前の大帝國をつくり、その間にあつた諸國が亡び去つたので、東西の交通は大いに開けま

貿易及び文化の
發展



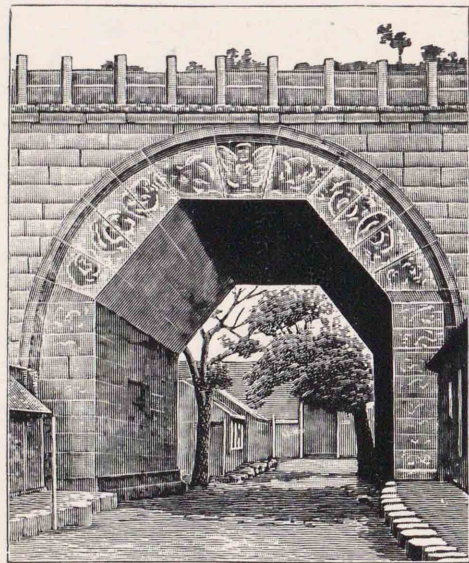
ローボ=コルマ



祥天文の宋(三)
(像畫堂笑晩)



祖世の元(一)



關 庸 居 (二)



字二孝忠の意筆祥天文(四)

- (一) 元の世祖が祖父成吉思汗以來の遺業を大成して、大帝國を建てた事の
 大要は、本文に載せてある。
- (二) 居庸關は、北平の北の昌平の西四里許にある。京張鐵道の南口停車場より
 は二里許である。北關門は元の世祖の創築にかゝり、關の長さ二十二尺、高さ四間、
 廣さ四間、佛像を彫刻し、且つ漢字・蒙古字・梵字・西藏字・西夏字・ホルイク字
 (西藏語の一種)の六種の文字を以て、喇嘛教禮讚の文が刻されてある。印度・
 西藏・支那及び蒙古の藝術趣味を混合加味した建築は雄大にして、彫刻の精巧活
 躍してゐる状は、當時の元氣充實せる時代精神を發揮したものである。
- (三) は文・天・祥の像。(四)圖に示す所の忠・孝の二字は文・天・祥の筆意を模した
 もので、唐崎常陸介が廣島縣賀茂郡竹原町磯宮八幡社内の手引巖に刻したものである。

マルコポーロ

した。當時東に來た西人の中最も名高いのはマルコポーロMarco Poloであります。

ジパング(日本國)始めて西洋に知らる
 アメリカ新大陸發見

衰運の原因

マルコポーロはもと伊太利Italyヴェニス港の商人であります。彼は十七歳の時、父と共に故郷を出で、元Veniceに留ること十七年、大いに世祖に信任せられました。後本國に歸るや、東方見聞録を公にしました。西洋諸國殆ど之を翻譯しない國なく、我が國も之を翻譯し、また翻刻しました。また我が國は同書によりジパングZipangu(日本國)の名を以て始めて歐洲に紹介せられました。かのコロンバスの如きも、此の書を愛讀し、大西洋より直航して、東亞に到らんとし、其間に思はずもアメリカ新大陸を發見したのであります。

第八章 明 時代

● 元の衰亡 元は世祖に至つて隆盛を極め、その後漸く衰へました。その原因は、(一)元の領土廣きに過ぎて、統一の政なき事。(二)元の相續法は必ずしも父子の世襲を認めなかつたので、帝位相續の

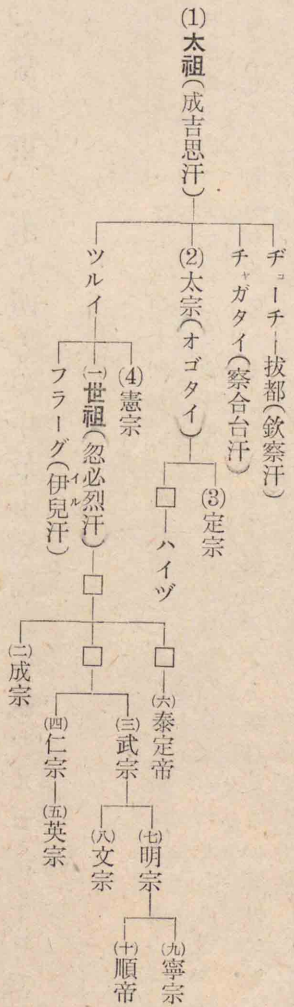
際は常に多少の争があつた事。(三)多年戦役の結果として財政困難となつた事などがあります。

こゝに於て、かねて蒙古人の下に屈服するを悦ばない漢人は、諸方に亂を起しました。中にも朱元璋は金陵(南京)によつて、まづ江南を定め、北征して元の都に迫りましたので、元の天子は、つひに蒙古に逃れました。かくて元は世祖の國號を改めてから九十八年にして亡びました。

朱元璋の旗擧げ
*皇紀二〇二八、
後村上天皇崩御
の年、足利義満
の時、西紀一三
六八

蒙古(元)の系圖

(西洋數字は元といふ國號制定前、
日本數字は國號制定後の世數)



元・明の革命

漢人の天下

皇后馬氏の婦徳

*皇紀二〇六二、
後小松天皇御
代、足利義持の
時代、西紀一四
〇二
永樂帝の北京遷
都

●明の太祖 朱元璋は即ち元のつぎの王朝たる明の第一世太祖であります。彼は武を以て亂を定め、文を以て國を治めたので、漢人はまたこゝに漢人の天子を戴くこととなりました。太祖はまた諸子を封じて、帝室の藩屏としたのはよいが、死後の事を心配し過ぎて、多くの功臣を殺したのは失策でありました。

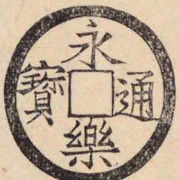
太祖の皇后馬氏は、太祖の創業以來、内助の功多く、その婦徳天下に聞え、その崩後宮女は歌を作つて、我が后聖慈、化家と邦とに行はれ、我を撫し我を育す。徳を懷ひて忘れ難し、徳を懷ひて忘れ難し。といひました。

●明の盛世 太祖崩じ、孫惠帝つぎました。帝は諸藩王の強さを恐れて、これを抑へましたが、叔父燕王は兵をあげて、反つて金陵を攻め、つひに惠帝に代つて天子となりました。これが第三世の成祖(永樂帝)であります。成祖は後に國都を今の北京に遷し、北は韃靼(元の改名)を征し、南は安

鄭和の遠洋航海

南を伐つたのみならず、惠帝の或は海外に逃れたるやを疑ひ、鄭和に命じて、これを探らしめました。鄭和は前後七回、南洋及び印度洋に遠洋航海して、明の恩威を示したので、同方面の諸國多く明に貢し、明人は國家の名譽として誇りました。成祖の後、約四十年は、明の極盛の世と稱せられました。また明はこの頃より美しい陶器の製造を以てあらはれました。

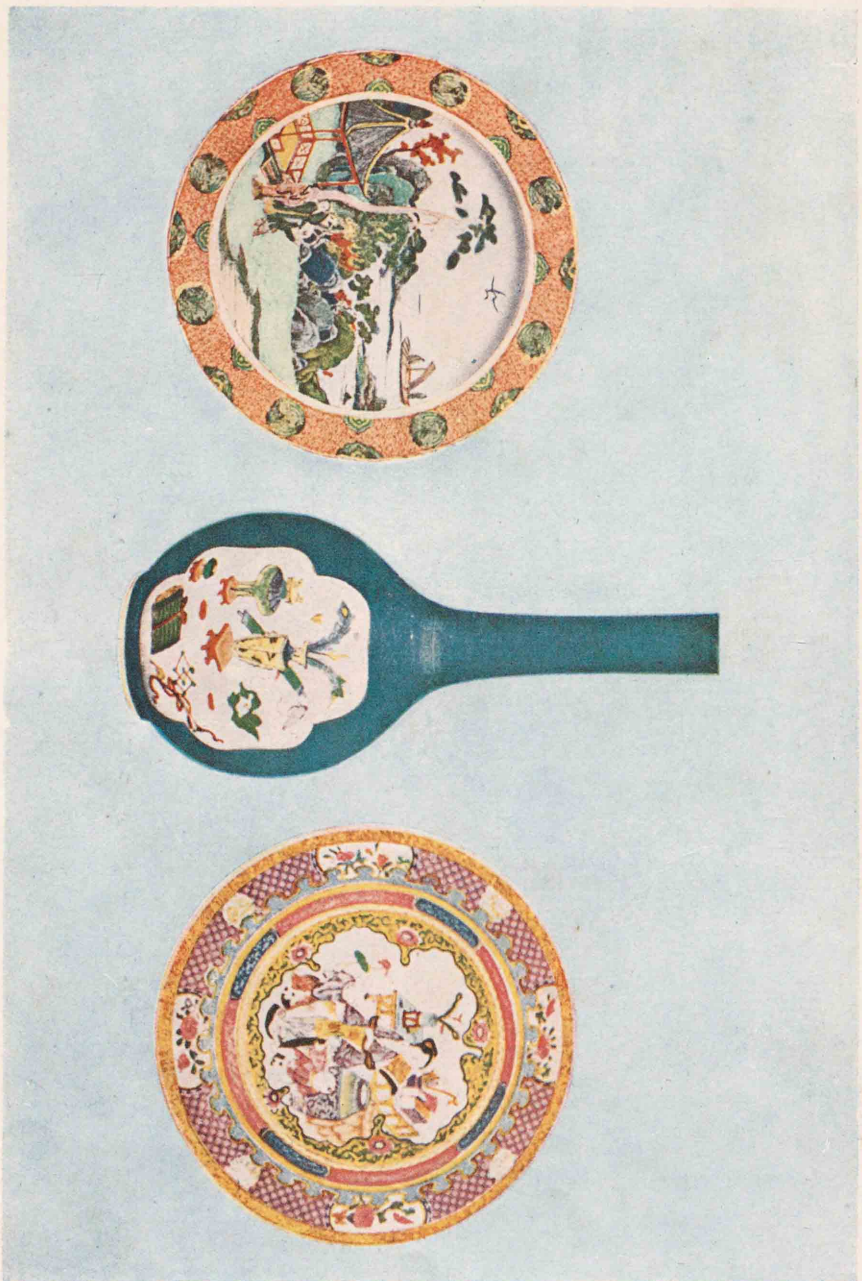
永樂錢の輸入



④ 日・明交通 足利氏時代に至りしば、明と交通し、明の永樂錢は、これより本邦に輸入せられました。その外明より藥種織物などが我が國に輸入され、僧侶・畫人などの明にゆきしものが少くありません。

北虜と南夷

⑤ 南北の外患 明も一盛一衰の例にもれず、第六世の英宗より後の明朝は、蒙古の遺衆、南は邊境の海賊の侵入などを被り、北虜・南夷といつてこれをふるひ恐れました。これら南北の外患は明朝をた



支那の陶器

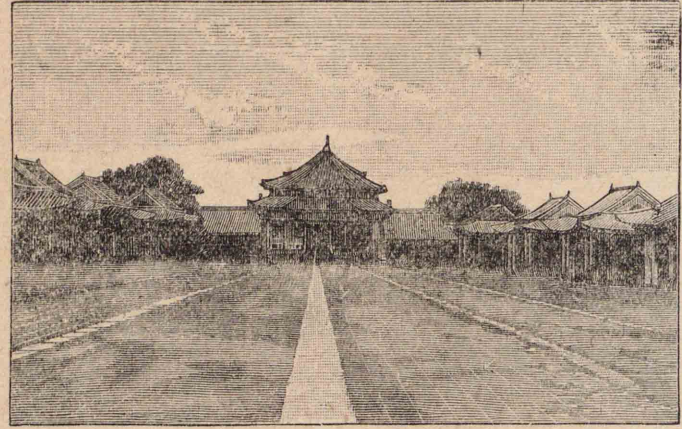
陶器は支那の世界的名産の一である。
 我國の陶器工業の進歩も近古支那特
 に明代以後の支那に負ふ所が少くな
 い。

いへん衰へしめました。

⑥ 朝鮮の役 高麗は久しく元に服従してゐましたが、元末明初に

至り、内には姦臣あり、外には南夷の難
 あつて、その國勢漸く衰へた時、李成桂
 は南夷をうつて功があり、遂に自立し
 て王位につき、今の京城に都しました。
 *これが朝鮮の太祖で、今の李王家の先
 祖であります。その後、豊臣秀吉は國威
 を海外に揚げやうとして、先づ朝鮮に
 出兵したので、明の神宗(萬曆帝)は大兵を
 發して朝鮮を援け、反つて大敗し、これ
 より後、明は益々衰へました。

⑦ 滿洲の勃興 この時に當つて、やが



(奉天の大政殿(清の太宗の宗創建))

朝鮮の太祖李成
 桂
 明と朝鮮
 *皇紀二〇五二、
 後龜山天皇御
 代、足利義滿の
 時、西紀一三九
 二

朝鮮役の影響

滿洲と明

蒙古と南宋

て明を覆すべき強敵滿洲人は明の東北に勃興しました。その状恰も中古史の末、南宋の衰へた時、蒙古が北方に興つたと同様であります。

*皇紀二二七六、
後水尾天皇御代、徳川家康の薨せし年、西紀一六一六

後金の太祖

*皇紀二二九六、
明正天皇御代、徳川家光の時、西紀一六三六

清の國號

清と朝鮮
*皇紀二二九七、
西紀一六三七

*我が足利義政より義晴の頃まで
王陽明

神宗時代の滿洲にヌルハチユといふ酋長がありました。興京(今のより少)方面より起つて、次第に近隣の諸部族を併呑し、自ら帝位につきました。これが後金の太祖であります。太祖はついで明と朝鮮の聯合軍を破り、益、勢を得、都を今の奉天に遷しました。是より太祖とその子太宗は、益、滿洲及び蒙古地方を征服し、太宗の時には國號を清と改めました。

時に朝鮮は猶明に好意をもつてゐたので、清の太宗は之を征して全く屈服せしめました。が、朝鮮人は清朝に心服しませんでした。

⑧ 元・明の文教 元の文學は小説戯曲の發達をその一特色とし、明はその中世に王守仁(號す陽明と)といふ學者が出て、良知の説を唱へ、道

知行合一の教

山中の賊と心中の賊

帖木兒

*皇紀二一八六、
後柏原天皇御代、足利義晴の時、明の中世、西紀一五二六



書 の 樹 藤 江 中

は我が心に求むべきことを説き、また知行合一の理を教へました。

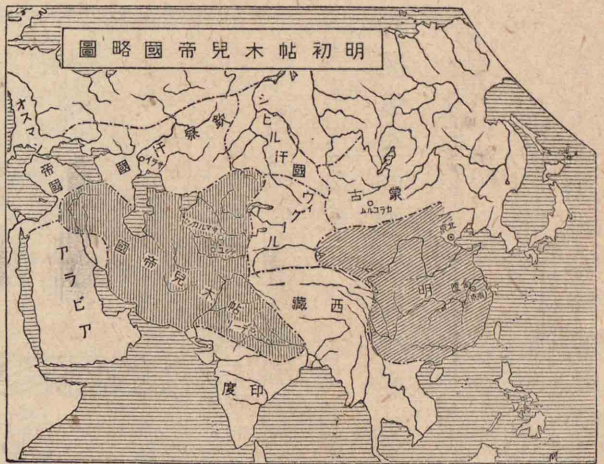
「山中の賊を破るは易く、心中

の賊を破るは難し」とは王陽明の一名言であります。王氏の學は陽明學として世に行はれ、我が中江藤樹・熊澤蕃山なども篤く之を信じました。實行力の強い學問でありました。

⑨ 莫臥兒帝國 明の初め、第二の成吉思汗ともいふべき帖木兒といふ豪傑があらはれて、中亞及び西亞の大部分を併せ、大國をたてました。

それより、百餘年を経て、その五世の孫バベルBaberは印度に攻め入り、莫

莫臥兒帝國の盛衰

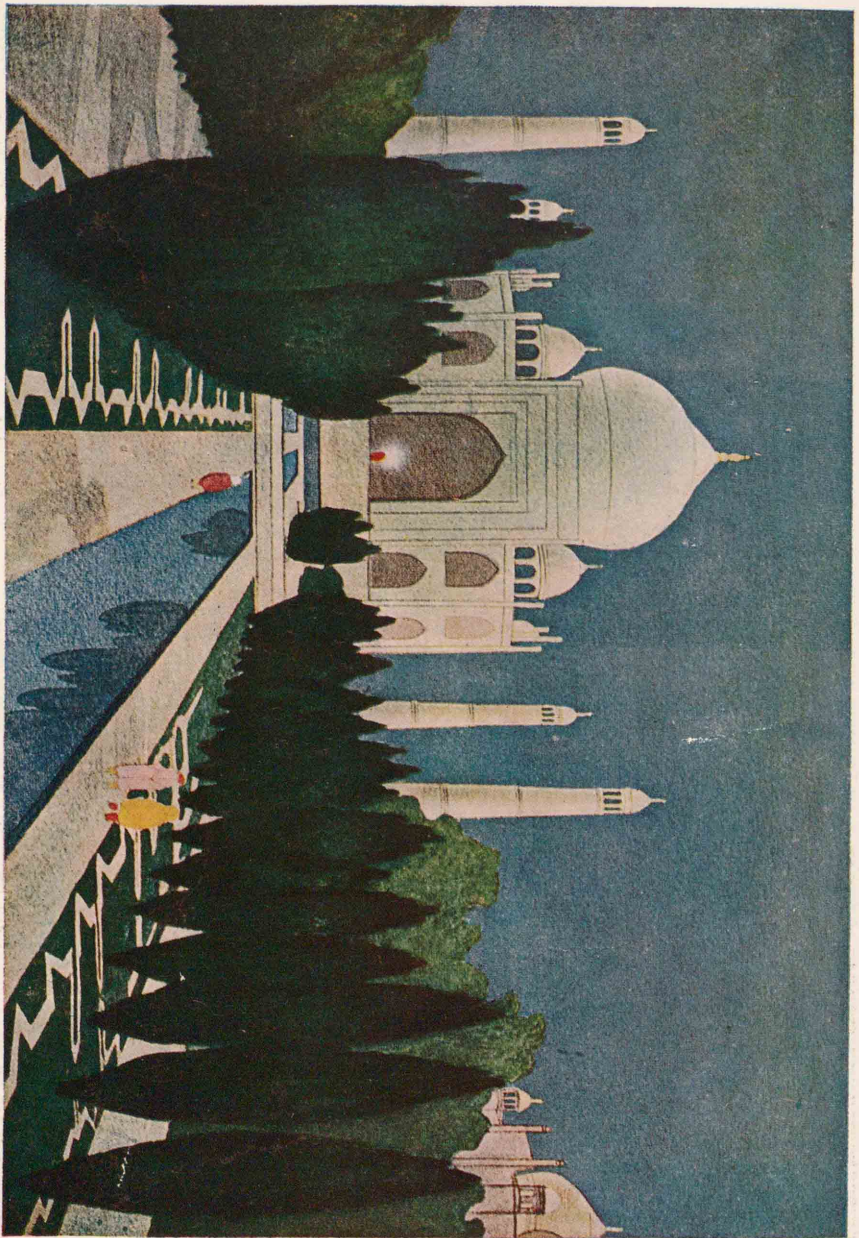


ガール
Khalid
臥兒(蒙古の轉音)帝國の基をたてまし
た。その孫阿克バルAkbarに至つて、同帝國益々
盛となり、その後全印度を一統したけ
れども、久しからずして帝國は漸く衰
へました。

帖木兒大王及び莫臥兒帝の系圖



フマユン—アクバル—ジハンギル—シャージハン—アラウングゼブ

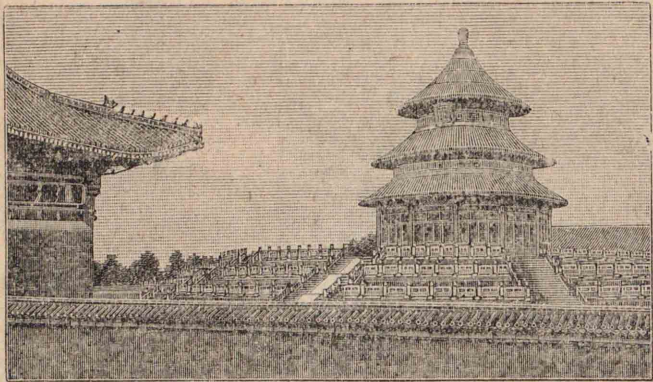


タムルハンマ

タジマハール (Taj Mahal)

タジマハールは、アクバル大帝以後の莫臥兒帝國の首府であつたアグラ市附近に在る。アクバルの孫シャージハン及び其皇后の陵廟である。シャージハン時代は印度空前の繁榮な時代として名高く、此陵廟は、白大理石の建築中に、青玉、瑪瑙、珊瑚等の珠玉を交へ入れて、甚だ美麗である。晴天の晝間に至るや、日光赫々、白石と相映じ、目を開け難い程である。月夜の觀望は特に美しいさうである。

第九章 清時代



北京天壇

毅宗の殉國

世祖の北京遷都と辮髮令

明の遺臣の忠義 鄭成功義兵を起す

● 明の滅亡 明の衰弱は既に前にのべましたが、(五七) 神宗の孫毅宗の世に至り、賊徒四方に起り、賊軍はつひに北京に亂入し、毅宗は自殺し、明は二百七十七年で亡びました。こゝに於て清朝第三世の世祖(太宗の子)は都を北京に遷し、辮髮の令を下して、滿洲の風俗に従はしめました。されど明の遺臣は、なほその諸王をいたゞき、江南に據つて回復を圖つたけれども、皆敗れ、清はつひに支那を統一しました。

● 鄭氏の孤忠 明の遺臣の中では鄭成

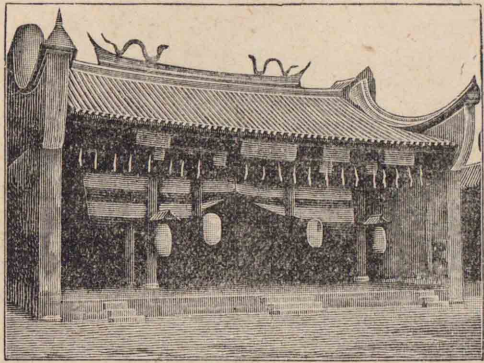
烈女田川氏

功が最も名高く、その母は我が平戸の田川氏で、烈女として有名であります。成功はまづ厦門(アモイ)に據り、ついで臺灣に至り、和蘭人をおひはらつて、これを占領し、力を明の爲に盡したが、つひにその志を得ませんでした。

國姓爺

朱舜水及び隱元

楠公碑文



開山神社

鄭成功は明の國姓朱氏を賜はつたので、國姓爺と呼ばれ、我が近松門左衛門の傑作の劇曲「國姓爺合戦」にも、その忠勇を傳へられてゐます。今の臺灣臺南縣社開山神社は成功を祭つた神社で、後殿にはその母田川氏も祭られてゐます。また明、清革命の際、明人の清に仕ふるを恥ぢて本邦に歸化したものが多く、中にも朱舜水は徳川光圀の師賓となり、僧隱元は本邦黄檗宗の開祖として、特に名高い。今の東京市本郷區東京帝國大學農學部構内は舊水戸藩邸で、舜水の病歿した處であります。光圀が湊川に建てた「嗚呼忠臣楠子之墓」の裏面の碑文は舜水の心をこめて作つたものであります。

二帝の文武の功

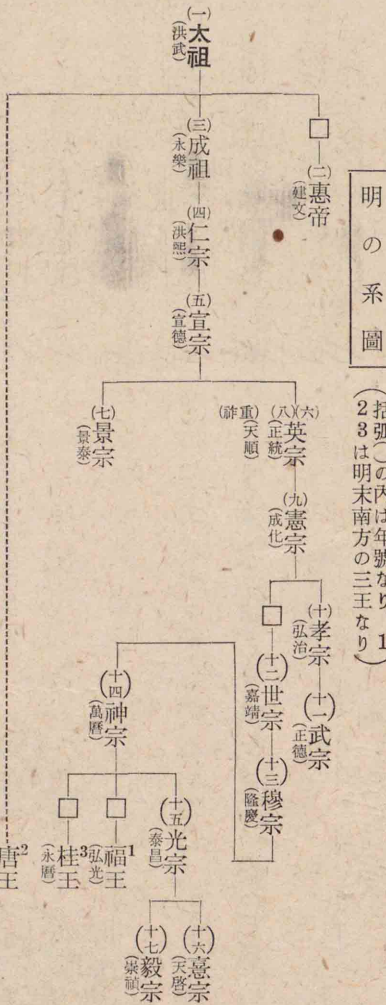
*後西・靈元・東山、中御門四天皇御代、徳川家綱・綱吉家宣・家繼・吉宗の五代



聖祖康熙帝

清朝の極盛

清は第三世の世祖のとき略支那を一統し、それよりその國運は益々盛となりました。特に第四世の聖祖(康熙)と、第六世の高宗(乾隆)の世は清朝の極盛時代であります。康熙帝は在位六十一年の間、内亂を平げ、臺灣を取り、蒙古を併せ、西藏地方を征服したる



明の系圖

(括弧)の内は年號なり、1、2、3は明末南方の三王なり

*櫻町・桃園・後櫻町・後桃園・光格
五天皇御代、徳川吉宗・家重・家治・家齊の四代

全盛と尊大

學術の進歩

武勳の盛なるのみならず、學術獎勵の功も甚だ大きいものであります。その孫乾隆帝もまた在位六十年の久しきに及び、天山南北兩路を平げ、バルマ^{Burma}・安南及びシヤム^{Siam}等を降したので、その領地は、漢唐二代の盛時にも優るやうになりました。けれども之が爲に、支那人をして益尊大ならしめ、外國を輕んずる習慣を生ぜしめました。



高宗乾隆帝

④清の學術 聖祖より高宗に至る百三十餘年間及びその後數十年間は、學術の研究も進歩し、有益なる書籍の著述が甚だ多い。中にも康熙字典の如きは、特に廣く本邦にも行はれてゐます。

第十章 歐米諸國のアジヤ經略

葡萄牙人の率先
*皇紀二二五八、
後土御門天皇御代、足利義澄の時、西紀一四九八

*皇紀二二一七、
後奈良天皇御代、足利義輝の時、西紀一五五七

*皇紀二二〇三、
後奈良天皇御代、足利義晴の時、天文十二年、西紀一五四三

①西洋人の東漸 明の中頃より、歐洲の形勢一變し、諸國競つて、航海植民の業につとめました。中にも葡萄牙人は莫臥兒帝國の建國より三十年ばかり前に、他の諸國に先だつて、始めて印度に達し、これより、その國人はつゞいて東洋に來り、つひに明の澳門^{マカオ}を占領



(左)寶瑪利 (右)啓光徐の明

してこれを根據としました。それより十數年前すでに本邦にも來航し、頗る久しく東洋貿易の利を占めてゐました。西班牙人も葡萄牙人

*皇紀二二二五、
正親町天皇御
代、足利義輝の
時、西紀一五六
五

蘭人の成功

*皇紀二二八四、
後水尾天皇御
代、徳川家光の
時、西紀一六二
四

サヴィエル及び
リッチ(漢名利瑪
竇)

について東洋に來り、フィリピン群島を占領してマニラに據り、また
我が國にも來ました。
Philippine Island
Manila

和蘭と東洋

Holland

和蘭人はやゝ後れて、東洋に着眼しましたが、先に
東洋貿易に着手した葡西兩國人と競争してつひに成功しました。
ジャバのバタビヤはその根據地で、我が國とも通商し、更に一時臺灣
JAVA
Batavia
を占領しました。

耶蘇教の東傳

西洋人の來航とともに、耶蘇教もまた東方に傳

はり、ジスイット派のサヴィエル及びリッチは、當時東洋に來た宣教師中、
最も名高いもので、明に於ても、徐光啓といふ大官その他の人が信
者となりました。
Xavier
Ricci

清露の交渉

久しく蒙古人の勢力の下に屈服してゐた露西亞
も、明の中世に至り始めて獨立し、その後次第にシベリヤを略し、清
の初めには、東亞に達し、遂に滿洲の北部に入つて、清露二國の争と
Siberia

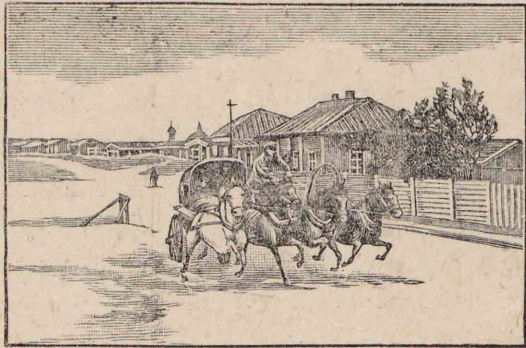
露西亞の獨立と
東略

*皇紀二三四九、
東山天皇元祿二
年、西紀一六八
九

*皇紀二二六〇、
後陽成天皇御
代、豊臣秀頼の
時、明の神宗時
代、西紀一六〇
〇

衰運の兆候

*皇紀二五一七、
孝明天皇御代、
西紀一八五七
印度女皇
*明治九年、西紀
一八七六



ベシヤリヤ風景

なりました。そこで清の康熙帝は露西亞の
ピーター大帝に交渉し、二國の使臣は尼布
楚(外州)に會し、會議の結果、外興安嶺を以
て二國の境界と定めました。

英領印度

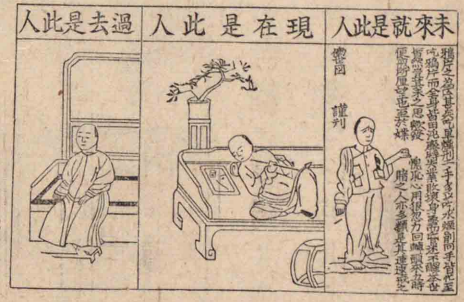
康熙乾隆の全盛時代のすで
に過ぎ去つた後は、清朝受難の時となり、阿
片戦役に至つて、始めて衰弱の状態をあら
はしました。これより先き、英吉利人も葡萄
牙人、西班牙人及び和蘭人についで東洋
の利權に着眼し、東印度商會をたてましたが、遂に印度の侵略に着
手して、衰へてゐた莫臥兒帝國を滅し、英國女王ヴィクトリアは印度
女皇の位を兼ねることとなりました。
Victoria

阿片戦役

英人は印度に勢力を得てから、盛に印度の阿片を清

阿片の害毒

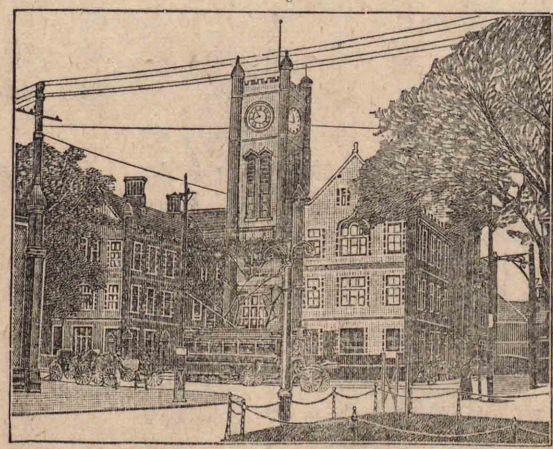
林則徐阿片を燒く
*皇紀二四九九
仁孝天皇御代、
西紀一八三九



阿片吸煙者之過去(康健) 現在(懈怠)之衰弱狀態

國に輸出し、その害毒甚だ恐ろしいので、乾隆帝の孫宣宗(道光)の時、特派大臣林則徐は、大いに憤つて廣東に於ける英國商人の阿片を燒き棄て、英人の通商を禁じました。そこで英國は貿易の保護を名として、戦を開き廣東、厦門等の港を封鎖し、遂に南京に迫りました。

七 南京條約 ことに至つて清朝も大いに恐れ、南京に於て和約を結び、償金を出し、上海、寧波、厦門、福州、廣東の五港を開き、且つ香港を譲りました。これを



上海海關

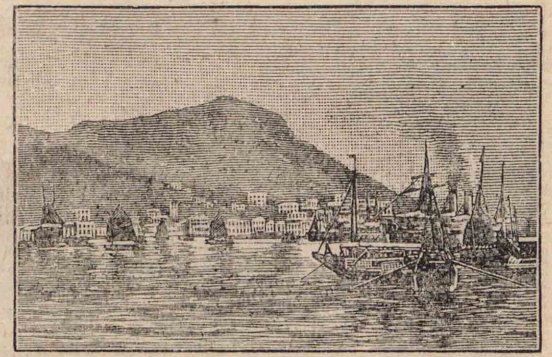
南京條約

上海の繁昌

外患と内亂

太平天國

會國藩などの義勇兵



南京條約といひます。これより後、清國と歐米諸國との條約が次第に結ばれ、上海の貿易は支那第一となりました。

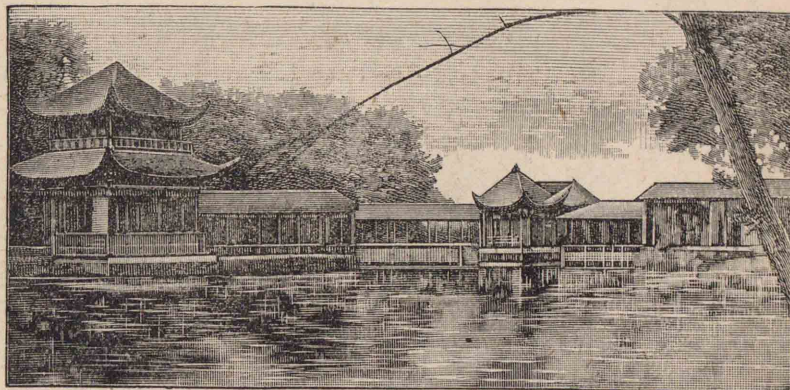
八 長髮賊 阿片戰役について起つたのは、長髮賊の内亂であります。清朝が同戰役に敗れたのに乘じて、洪秀全は亂を廣西省に起し、國號をたてて、太平天國といひ、遂に南京に據りました。之を長

髮賊(剃頭辮髮せ)といひます。時に官軍は之を平げることが出来ず、勤王の名臣曾國藩、李鴻章など義勇兵を起して、賊軍を破つたけれども、賊勢は未だ衰へませんでした。



太平天國玉璽

北京條約
*皇紀二五二〇、
孝明天皇萬延元
年 西紀一八六〇



會國藩の祠 (湖南省長沙縣)

●英佛の侵入 時に廣東の官吏が一英船に入つて、有罪の清人を捕へて、英國人と衝突した事があつた上に、佛國の宣教師も廣西に殺されたので、英佛の軍が聯合して遂に北京を陥れました。清國はつひに和を請ひ北京條約を結んで、償金を出し、基督教の布教を許し、牛莊漢口などの港を開きました。

⊕長髮賊平定 これ等の外患の爲に、内亂の平定は大いに後れましたが、會國藩など益奮戦し英人ゴルドンなどが官軍を助けたので、賊勢漸く衰へ、洪秀全も敗れ死じ、餘賊も次第に平定されましたが、

ゴルドンの義勇

戰亂の影響

この亂の起つてより十五年の間その難を被つた地方は十六省に亘り、清の國力大いに疲れ、外國の壓迫益甚しくなるやうになりました。

⊕露國と滿洲 露國の東方侵略の鋒も、康熙帝の時、や

鈍つたが、露國は常に機會をねらひ、長髮賊の亂に乗じて、黑龍江以北を取り、また清國と英佛二國との和議に斡旋した報酬として烏蘇里江以東を譲りうけ、その南端に浦鹽斯德港を開いて、東方經略の根據地としました。こゝに於て露國は漸く朝鮮の北境をも壓せんとする勢を示すやうになりました。



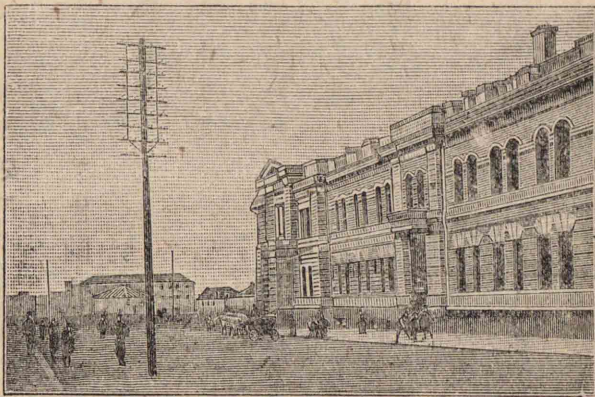
ゴルドン

浦鹽斯德の開港
露國と朝鮮
滿洲經略の餘波
*明治八年

⊕樺太占領 ついで露國は我が國に交渉し、千島と換へて樺太島

露國の地慾

*明治四年



浦 鹽 斯 德

露國は之に應ぜず、清國はつひに償金を出し、一部の地を譲つて、その局を結びました。尼布楚會議に清國がやゝ優勢であつた時とは形勢が全く一變したのであります。

*明治十四年

露國の南下と英國の反對

*明治二十年

英・露の次に佛蘭西

*皇紀二五二二、
孝明天皇文久二
年、西紀一八六
二

*明治十六年

④ 英・露衝突

露國は中亞侵略の鋒を南に進めて、印度洋に進出しようとし、印度を領する英國は、無論之に反對しましたが、つひに一歩を譲つて境界を議定し、戦を開かずに落着きました。

⑤ 佛國と安南

東洋經略について英・露二國に次ぐものは佛蘭西であります。佛國は清の初めから安南に着眼し、その地の王族阮福映を援けて安南を統一せしめ、且つ基督教の布教に盡力したが、安南人は佛人に親しまず、しばしば、宣教師を虐待したので、佛國は安南を攻めて、つひに交趾支那の地と償金とを得、ついでカンボヂヤをもその保護國としました。その後、安南王は佛人の專横を憤つて戦を開いたが、利あらず、遂に東京地方を割き、且つ佛國の保護國となることを約して和を結びました。

⑥ 清佛戦争

然るに、清國は安南を以て藩屬國なりとしてこの講和に異議を唱へ、清佛二國の戦となりましたが、つひに二國共に讓

*明治十八年
佛領印度支那の
成立

步して、和を講じ、清國は佛國の東京地方を占領することを承認しました。かくて佛領印度支那成立し、さきに印度に於て英人と競争して失敗した佛人も、この方面では成功しました。

獨・露・佛・英諸
國の勢力益々東
漸す

●西洋諸國の壓迫 清國は、阿片戦争以來、内外多難で、國運漸く下り坂となり、明治二十七八年(阿片戦争より五十餘年後)の日清戦役に於て、更にその弱點をあらはしましたので、西洋列強の壓迫、益甚しく、その後數年の間に、獨逸は膠州灣(山東省)を、露國は旅順口(奉天省)と大連灣(奉天省)を、佛國は廣州灣(廣東省)を、英國は威海衛(山東省)を借りうけて、諸國は競つてその國の勢力を清國に伸ばさうとしました。

北米合衆國と東
洋及び南洋

*明治三十一年
*同年

これまでアジヤ方面にその領地のなかつた北米合衆國も、東洋及び南洋に着眼して、つひに布哇國(ハワイ群島)を併せ、また西班牙と戦ひ、これに勝つて、Hawaii群島を得ました。

第十一章 清の末路と中華民國

革新保守の二派

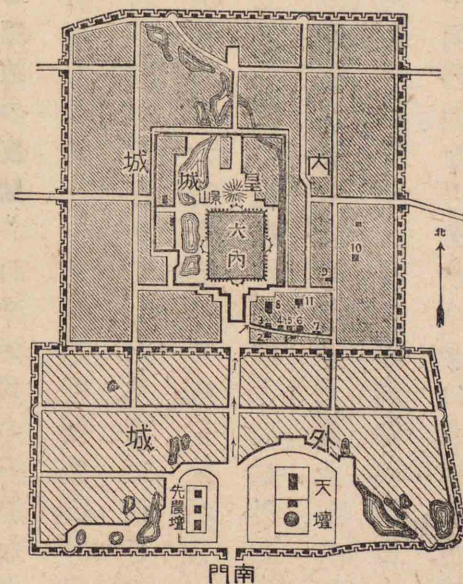
義和團の暴徒

*明治三十三年

北清事件

●壓迫の反動 西洋諸國の壓迫などによつて、清國の形勢は益々困難になつたので、その皇帝德宗(光緒帝)は康有爲(カウイウ)を任用して、政治の革新を圖らうとしました。然るに清廷の舊臣及び滿洲人多くは之を悦ばず、西太后を擁護して、政を聽かしめ、保守黨の勢また盛となつた上に、列強の壓迫は清國人の排外心を激し、山東省より義和團といふ暴徒が起り、遂に北京に亂入して、諸國の公使館を攻め圍みました。こゝに於て、日英米露佛奧伊の八國の聯合軍は北京に入つて、各國公使などを救ひ、遂に北京を占領しました。時に德宗と西太后は、一時西安府(陝西省)に避難しましたが、李鴻章などをして和を講ぜしめ、償金を出し、罪を謝して局を結びました。これを北清事件といひます。

北清事件の際、我が國軍隊の精銳で、その規律の嚴肅なることは、廣く各國に知られました。清國もまた我が國の義氣に感じて、我に依頼するの念を起し、或は官吏を派して我が制度・文物を視察せしめ、或は留學生を遣はして、我が諸學校に入學せしむることが漸く多くなりました。



(說 解)

- 1 北京城總周圍……………九里許
- 2 內城周圍……………六里許
- 3 皇城周圍……………四里許
- 4 大內周圍……………二里半許
- 5 列國公使館等位置
- 6 獨逸
- 7 北米合衆國
- 8 露西亞
- 9 日西本
- 10 佛蘭西
- 11 英吉利
- 12 白耳義
- 13 清國總理衙門(外務省)
- 14 清國總稅務司ロバートハート邸宅
- 15 軍隊進入路

● 韓國の併合 朝鮮は我が徳川氏時代以後、我が國と平和の交通をつゞけ、明治維新の時に至り、我が國に促^{ウナガ}されて、列國とも條約を

日清戰役

*明治三十年

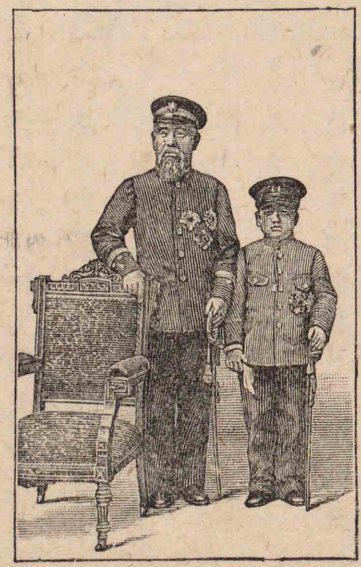
日露戰役

*明治三十八年

韓國併合

*明治四十三年八月

結びましたが、清國は朝鮮の獨立を悦ばず、日清兩國の意見、朝鮮に對して一致せず、つひに二十七八年の日清戰役となり、その戰後、朝鮮は我が國の爲に獨立の名義完全し、國號を韓と改めました。然るに、露國は北清事件の亂に乗じて滿洲を占領し、更に韓國を威壓しようとしたので、我が國は自國の安全と、東亞の平和とのために、露國と戦ひました。その結果、韓國は我が保護國となり、我が國は新に統監を京城に駐在せしめました。しかし、猶未だ韓國の治安を保ち難い形勢があつたので、韓國は遂にその國を我が帝國に併合することとなり、東洋の平和が維持されました。



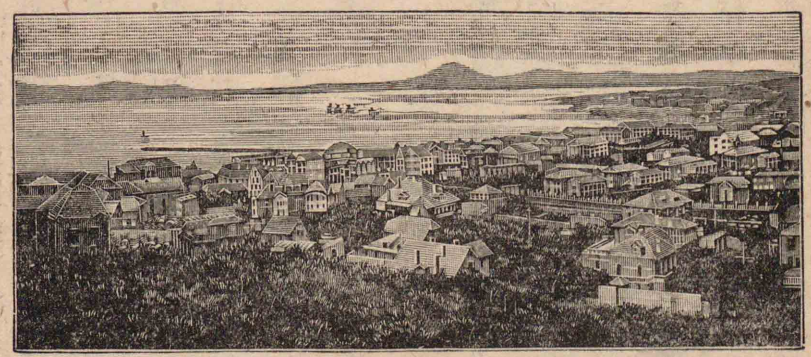
文博藤伊監統國韓と下殿子世王李

膠州灣占領

日支條約

國は此の大方針に基づき、獨逸に對しその日本海支那海方面にある艦艇の撤退及び膠州灣租借地の引渡しを要求しましたが、應じなかつたので、遂に戰を宣し(年大正三、月八)膠州灣を占領しました(同年十、月一)。又我が國は此の大方針により、翌年五月、日支條約を結び、(一)遼東半島の租借期限を延長し、(二)南滿洲及び東部蒙古に於ける我が優越權を認めしめ、(三)山東省に於ける獨逸の利權を我が國に於て繼續する事などを承認せしめました。

●袁氏失敗 袁世凱は大總統となつた後、共和制を廢して、自ら皇帝にならうとしま



青島市の一部

第三革命軍

袁氏の悶死

黎氏就任
突然の復位

世界大戰參加

した。こゝに於て、唐繼堯、蔡鍔(サイガク)など之に反對し、大勢は袁氏に不利となつたので、袁世凱は帝制宣言を撤回し、終に病死しました(年大正五、月六)。是に於て副總統黎元洪は大總統となり、一時平和となりました。

●清帝の復位及び世界大戰參加 その後安徽省督軍張勳は兵を率ゐて、北京に入り、武力を以て國會を解散せしめ、一時宣統帝を復位せしめましたが(年大正六、月七)、段祺瑞(ダンキスエ)に討たれて、忽ち失敗し(同年、月)民國は依然として存立しました。

この事變後、黎總統は責を引いて辭職し、馮國璋(ヒョウキョウ)之に代り、つひに支那も獨逸二國に對して戰を宣し(年大正六、月八)ついで徐世昌が大總統になりました(年大正七、月十)。

●南北對立 上記の如く、國會の解散された時、議員は多く南方に避難しましたが、彼等は國會の復活を主張し、遂に孫文を大元帥として、廣東に軍政府を開き(年大正六、月九)西南五省(廣東、廣西、雲南、貴州、四川)之を助けたの

南北兩政府

で、今や支那は、南北の兩政府が對立するやうになりました。その後兩政府は列國の勸めに従ひ、上海に和平會議を開くこととなりましたが(同八年二月)その效果なく、孫文はつひに南方政府の大總統となりました(同十年四月)。

●九 山東問題 從來支那人は、大正四年の日支條約に不満でありましたので、世界大戰終つて、巴里講和會議の開かるゝや(大正八年一月)支那は獨逸に宣戰したといふことを理由として、この條約を無視し、獨逸より直接に山東の還附を受けんと盡力しましたが、その目的を達しませんでした。これ等の事情により、支那の一部に、所謂排日運動が起るやうになりました。

山東問題の解決

●十 華盛頓會議 大正十年(一九二一年十一月)に至り、日・英・米・佛・伊の世界の五大國は、米國の華盛頓(ワシントン)に會議し、各國軍備の制限、太平洋問題及び極東問題等を協議し、平和の保障を計りました。支那もこの會議

徐世昌在職四年



徐世昌

に参加し、つひに我が國と協議して、山東の還附を受け、支那は膠州灣を開放し、山東鐵道は我が國より譲り受け、もと獨逸の採掘權を有して居た鑛山は、日支兩國に於て經營することなどを議決しました(大正十一年二月)。

●十一 多事の支那 是等の内外多事の際、大總統であつた徐世昌は、在職四年にして辭職し(大正十一年五月)、黎元洪之に代りました。が、直隸派軍閥の壓迫を受け、在職一年を

奉直戰爭
臨時執政段祺瑞

以て辭職し、曹錕(サウケン)之に代りました(大正十二年十月)。彼は即ち直隸派軍閥の首領であります。これに對し奉天に據つて滿洲を勢力範圍として居る張作霖は悦ばず、大正十三年九月に至り、張作霖と直隸派の有力者吳佩孚(ウヰフ)とは、長城方面に開戰し、所謂奉直兩派の戰爭になりました。その結果、曹錕は幽閉(ウツク)され(同十一年十一月)、段祺瑞が臨時執政となりま

孫文の永眠

段執政退職

大元帥張作霖

三民主義

蒋介石の北伐

國民政府の成立



した(同年同月)

段執政もつひに執政退職のやむなきに至りました(大正十五年四月)。かくて張作霖は北京に入り、自ら大元帥となりました。

國民政府の成立

孫文の死後、その主唱した民族、民生、民權の三

民主義を宣傳して人望を得た南方の總司

蔣介石は廣東を出發して、北伐軍を進め、

つひに南京に國民政府を建てました(昭和二年四月)。

石

これより北方の張作霖は漸く不利になり



孫文とその夫人

孫文は大正十四年三月十二日北平のロックフェラー病院に於て永眠した。最近世の支那史上に名高い彼の名聲は其歿後ますますあらはれて、多數の支那人に追慕崇拜されて居る。其夫人も其遺志を奉じて國事に盡力しつつあるといふ。

張學良

北京より退いて奉天に入らんとして不慮フの死をとげ、その子張學良は東三省保安總司令となりましたが、つひに國民政府に服従しました。その後國民政府は引續いて發展して、以て現代に及んでゐます。

第十二章 滿洲帝國

●滿洲事變の發生 日露戦役の後、我が國は巨額の資本を用ひ、多大の努力を以て滿洲の開發に力めました。これが爲に文化の恩澤は漸く滿洲諸方面に及び、支那は動亂相つぐも、滿洲は平和の別天地天地のやうでありました。然るに支那人の一部は大正四年の日支條約締結以來、我が國を誤解して、しばしば排日運動を行ひましたが、張學良が滿洲の支配者となるや、我が特殊權益を侵害し、我が國の經濟的基礎をくつがへさうとしました。

九月十八日

かくて昭和六年九月十八日、張學良の兵が滿鐵線路を爆破するや、我が皇軍は自衛のため斷然立つて張氏軍と戦ひ、南滿の要地を占領して、皇軍の向ふ所敵なき状となりました。

この間南京の國民政府は歐洲諸國によつて、國際聯盟に於ける我が國の地位を不利ならしめようと試みましたが、正義によつて行動する我が國は、少しも動じませんでした。

◎滿洲國の成立と承認 滿洲三千萬の人民は、久しく張氏父子の壓制に苦しんでゐましたが張氏の勢力が完全に滿洲より一掃されたので、獨立の機運はこゝに熟し、さきに退位した宣統帝を執政に推戴し、東北四省を合して、新に滿洲國を建て、昭和七年に大同といふ年號を定め、新京(もと)長春を首府として、新國家は洋々たる新生の第一歩をふみ出しました。

我が國はこの滿洲國を列國に率先して承認しました。これはたゞ

溥儀執政推戴

滿洲國の建設

大同元年は昭和七年に當る

*昭和七年九月十五日



新國家滿洲國の旗



配 政 執



儀 溥 政 執 國 洲 滿



胥 孝 鄭 理 總 務 國 國 洲 滿

日・滿兩國の協
同
世界平和の基

善隣のよしみをつくさんとするためのみならず、滿洲國の健全なる發達と、日・滿兩國の圓滿なる協同は、東亞の禍根ワコネを除き、世界の平和を保つるの基であるによるものと思ひます。

③ 滿洲帝國の發展　その後、滿洲國はいよ／＼健全に發展し、大同三年（昭和九年）三月、帝制を採用し、執政は新に滿洲國皇帝となり、康徳といふ新年號をたてました。

④ 滿洲國皇帝陛下御訪日　滿洲國皇帝陛下には、建國以來日本の援助に感激され、御訪日の思召深くあらせられました。昭和十年四月に至り、それが實現されました。御還りの後、日・滿一心一體の大詔も發布されて、日・滿不可分の關係はいよ／＼かたくなり、ました。

⑤ 駐日滿洲國大使館の成立　日本は滿洲國に對し、初めより大使を派遣してゐましたが、滿洲國は日本に公使館を置いてゐました。これは建國の際準備が至らなかつたためでありました。昭和十年

昭和十年三月二十三日滿・ソ兩國代表正式調印

五月に至り、いよく大使館に昇格の事が確定しました。
⑥ 北滿鐵道讓受 ソヴェトロシア政府から、北滿鐵道の讓渡を申出で、我が外務省は之を滿洲國に傳へ、滿・ソ兩國代表は東京に於て會議を行ひ、昭和八年以後、三箇年に互る交渉の結果、つひに成功したのは、滿洲國のために賀すべきことであります。

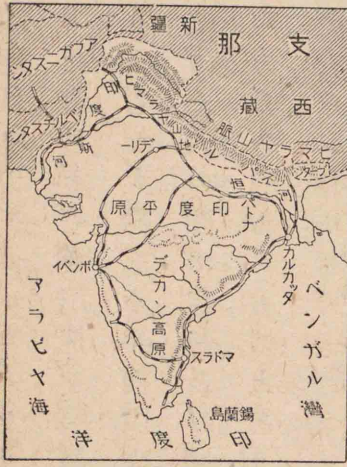
第十三章 現代の東洋

思想・學術界の近狀

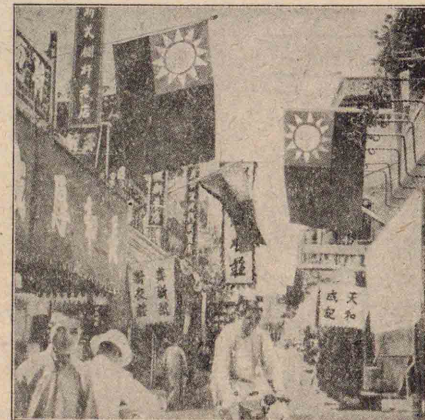
● 支那の現状 中華民國は、今や南京を首府とし、蔣介石の勢力によつて統治されてゐますが、いろくの内争あり、未だ完全なる統一國と見なし難いやうであります。
思想界・學術界の近狀を一言すれば、或は黎明期的思想あり、或は新文化的運動あり、或は新舊思想の對立などがあります。近代の學者としては、梁啓超、羅振玉、胡適などが有名であります。

特に大賢偉人を要する支那

● 支那の古と今 あゝ、支那は萬里國土を闢き、世を閱すること幾千年、文化早く開け、聖賢英雄も多く出ました。試みに世界の歴史を見れば、盛衰強弱、皆それゝ原因があります。如何に地廣く人衆しとて、徳なく力なければ、如何して治を致し盛を望むことが出来ませう。支那は今や特に大賢偉人を要して居ます。誰かよく支那をして世界列國とともに、平和隆昌ならしむるでありませうか。



印度略圖



青天白日旗

● 印度の近狀 次に英領印度に於ては、明治四十四年(西紀一九一一年)印度總督

印度政廳移轉

印度の自治運動

政廳所在地をカルカッタよりデリーに遷し、その統治は益々堅實となりました。大約三十年前頃より一部の士人の間に自治及び國産使用の説を唱ふるものもありましたが、その傾向はやゝ穩和となり、且つ印度に對する英國政府の統治の方針は依然として確定不變であるといひます。

④ 歐米諸國と東洋・南洋 歐米諸國の東洋と南洋とに於ける勢力は、その最も盛なりし時にくらべては、やゝ衰へたやうであります。が、なほ頗る盛なものがあり、英國は印度・濠洲及びその他の多くの領土を有し、ソヴエト・ロシアの中には西比利亞及び中央亞細亞の



印度の二人偉人
ガングーデー - ルーゴタ

日本國內外の盡力

大地方あり、佛國も印度支那方面に、和蘭もジャバ等の南洋に、それぞれ領土を有し、葡萄牙の如き小國も印度のゴア・ダマン・ヂウ及び南支那の澳門を領し、北米合衆國もハワイを領し、フィリピン群島をその勢力範圍としてゐます。東洋に關して、亞細亞大陸方面及び南洋方面に對して、大いに注意もし、着眼もすべき我が國民はこれ等の實情について深く思はなければなるまいと考へます。

第十四章 東洋史上より觀たる我が國の

使命と國民の覺悟

國民の覺悟 明治維新以來、我が日本帝國は、内は制度文物の進歩發展を圖ると共に、外は強國ロシアの大軍を撃破し、また韓國を併合して東洋平和のために盡力し、更に進んで世界大戰に参加して、世界の平和に協力した事などによつて、その國際的地位は大いに

忠君愛國の至誠

向上して、東洋に於ける主要國たる名實はますます、高まりました。されば日本國民はいよゝゝ奮勵自重して、忠君愛國の至誠を盡さなければなりません。

共存共榮

中華民國や印度は、過去の我が國の文物發達に益したことの多大であつたことを回顧すれば、その現狀に對して、無關心であり得ないのみならず、中華民國や印度や滿洲國の國情の安定と否とは、實に東洋乃至世界の平和に關係する所が甚だ深く、その間に於ける我が國の地位の重大なることを思へば、私共は心よりこれ等諸國の安定を希望し、共存共榮の實を擧ぐること、に努力したいと思ひます。これがやがて世界人類のためにも貢獻し得る最大義務の一つであると思ひます。

〔完〕

上古史摘要年表

(本系の左傍に括弧を附して、匈奴と記せるは、匈奴は秦より後漢に互り、史上にあらはれたる事を示すものなり)

太古…黃帝…帝堯…帝舜…夏…殷…周…秦…前漢…新…後漢
匈奴

年	皇紀西紀	重要事蹟	年	皇紀西紀	重要事蹟
前1000頃	前1000頃	黃帝君臨	孝元	四十五	秦亡ぶ(秦の時文字の改良及び筆の青墨あり)

共存共榮

いのみならず、中華民國や印度や滿洲國の國情の安定と否とは、實に東洋乃至世界の平和に關係する所が甚だ深く、その間に於ける我が國の地位の重大なることを思へば、私共は心よりこれ等諸國の安定を希望し、共存共榮の實を擧ぐることにより努力したいと思ひます。これがやがて世界人類のためにも貢獻し得る最大義務の一つであると思ひます。

[完]

上古史摘要年表

(本系の左傍に括弧を附して、匈奴と記せるは、匈奴は秦より後漢に互り、史上にあらはれたる事を示すものなり)
(大體第一章より第三章に至るまで)

太古…黃帝…帝堯—帝舜—夏—殷—周—秦—前漢—新—後漢

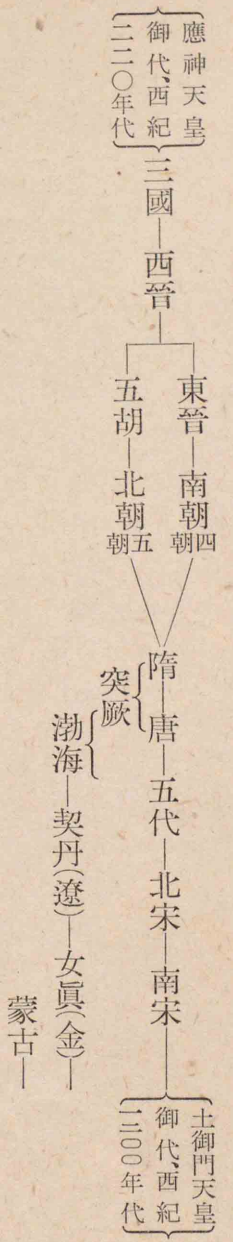
匈奴

年	皇紀	西紀	重	要	事	蹟
神武	前1000	前2700	黃帝君臨			
綏靖	前900	前2600	帝堯即位			
綏靖	前800	前2500	帝舜即位			
神武	前700	前2400	夏興る			
神武	前600	前2300	夏亡び殷興る			
神武	前500	前2200	殷亡び周興る			
神武	前400	前2100	殷の箕子古朝鮮の王となる			
神武	前300	前2000	周の東遷 <small>春秋時代始まる</small>			
神武	前200	前1900	齊の桓公の覇業全盛			
神武	前100	前1800	釋迦生まる			
神武	前50	前1700	孔子生まる			
神武	前40	前1600	孔子死す			
神武	前30	前1500	孟子生まる			
神武	前20	前1400	阿育王マガダ國王となる			
神武	前10	前1300	周亡ぶ			
神武	前5	前1200	秦の天下統一			
神武	前4	前1100	秦の蒙恬匈奴を征す。長城増築起工			
神武	前3	前1000	孝元			
神武	前2	前900	開化			
神武	前1	前800	匈奴			
神武	前10	前700	秦亡ぶ。秦の時文字の改良及び筆の精製あり			
神武	前9	前600	項羽自殺、漢の高祖の天下統一			
神武	前8	前500	衛滿古朝鮮王となる			
神武	前7	前400	漢文帝即位元年			
神武	前6	前300	漢武帝即位元年			
神武	前5	前200	張騫西域より還る。東西文物の交換漸く起る			
神武	前4	前100	武帝古朝鮮を平ぐ			
神武	前3	前50	司馬遷の史記成る			
神武	前2	前40	新羅の建國			
神武	前1	前30	高句麗の建國			
神武	前10	前20	百濟の建國			
神武	前9	前10	王莽の篡立			
神武	前8	前5	後漢の光武帝即位元年			
神武	前7	前4	大月氏のカニシカ王即位			
神武	前6	前3	佛教始めて支那に傳來す			
神武	前5	前2	班超西域都護となる			
神武	前4	前1	赤壁の戦			
神武	前3	前5	魏の曹丕篡立して後漢亡ぶ。後漢の時紙の發明あり			

中古史摘要年表

(大體第四章より第六章に至るまで)

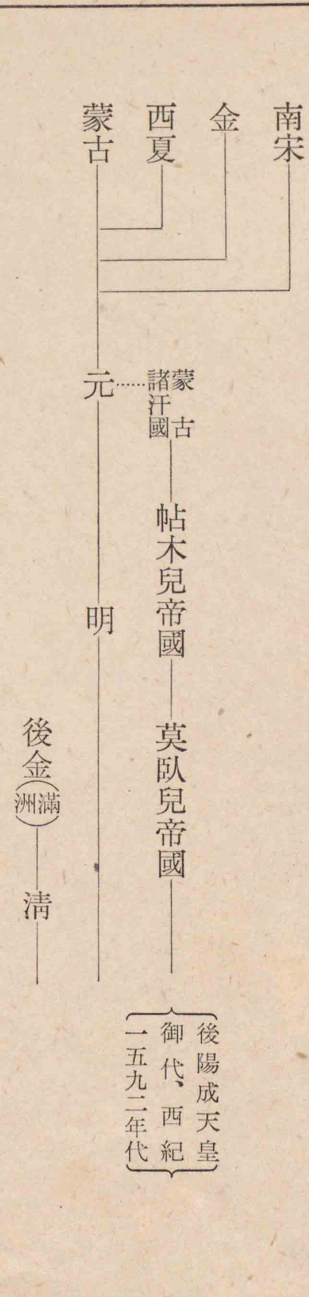
(本系の左傍に括弧を附して、突厥及び渤海などと記せるは、是等の諸種族の史上にあらはれし時代を示すものなること上古史年表に記せしが如し)



年	皇紀西紀	重	要	事	蹟	
應神	八二	三三	蜀漢の劉備帝を稱す		齊明 一三七	唐の高宗西突厥を破る
同	八九	三九	吳の孫權帝を稱す		天智 一三三	唐の高宗百濟を滅す
同	八四	三三	諸葛亮(孔明)死す		同 一三六	唐の高宗高句麗を滅す
同	九三	二三	蜀漢亡ぶ		持統 一三五	則天武后の篡立
同	九五	二五	司馬炎篡立して魏亡ぶ		元明 一三三	唐の玄宗開元元年
同	九四	二〇	西晉の武帝(司馬炎)の天下統一		同 一三五	渤海建國の始
仁德	九六	三六	西晉亡ぶ		孝謙 一四五	安祿山反す
同	九七	三七	東晉興る		宇多 一五四	日本遣唐使の廢止
同	一〇四	三三	肥水の戰		醍醐 一五七	唐亡ぶ
允恭	一〇九	四九	天下宋・魏の南北兩朝となる		同 一五六	契丹の太祖即位す
武烈	一一三	五三	梁の武帝即位元年		同 一五六	契丹、渤海國を滅す
欽明	一一三	五三	百濟佛敎を我が國に傳ふ		村上 一六〇	宋の太祖即位元年、宋初以後印刷の術ますます發展す
同	一一三	五三	ムハメッド アラビヤに生る		圓融 一六元	宋の太宗天下を一統す
崇峻	一二四	五九	隋の天下一統		後三條 一七元	宋の王安石新法を行ふ
推古	一二五	六五	隋の煬帝即位元年		鳥羽 一七五	金(女眞)の太祖の元年
同	一二七	六七	小野妹子隋に使す、日本支那交通の始		崇徳 一七五	金・宋連合して遼を滅す
同	一二八	六八	隋亡び唐興る		同 一七七	北宋亡び、南宋の高宗即位す
同	一二七	六七	唐の太宗貞觀元年		同 一八〇	宋・金の和
舒明	一二九	六九	唐の僧玄奘印度にゆく		二條 一八三	蒙古の鐵木眞(成吉思汗)生る
同	一二〇	七〇	日本遣唐使の始		土御門源賴家 一八六	南宋の朱子卒す
同	一二五	七五	唐の太宗東突厥を滅す			
同	一二五	七五	景教唐に入る			

近古史摘要年表

(大體第七章より第八章に至るまで)

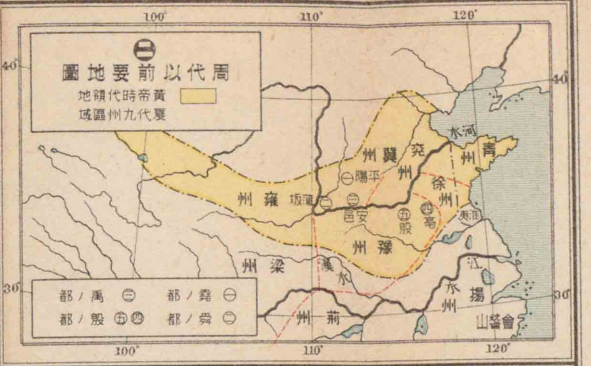


年	皇紀	西紀	重 要 事 蹟	年	皇紀	西紀	重 要 事 蹟
土御門源實朝	一八六	一三〇六	蒙古の太祖(成吉思汗)即位元年	後村上足利義滿	二〇三	一五六	明興り元亡ぶ。明の太祖即位元年
後堀河北條義時	一八四	一三〇四	蒙古軍阿羅思に侵入す	同 長慶	二〇二	一五六	帖木兒中亞を平定す
北條泰時	一八四	一三〇四	金の滅亡(ロシア)	同 後小松	二〇三	一五三	朝鮮の太祖(李成桂)即位元年
同	一八六	一三〇六	拔都の西征	同 同	二〇三	一四〇三	明の成祖(永樂帝)即位
同 龜山	一八〇	一三〇〇	元の世祖即位元年	同 同	二〇五	一四〇五	鄭和の遠洋航海
同 時宗	一九三	一三七三	蒙古國號をたてて元といふ	同 義持	二八六	一五六	パベル・莫臥兒帝國を興す
同 後宇多	一九三	一三七三	マルコ・ポーロ元に来る	同 義隆	二八六	一五六	明の王陽明死す
同 同	一九五	一三七五	南宋亡ぶ	同 後奈良	二八六	一五六	此頃韃靼、明に入寇す
同 同	一九九	一三七八	元軍我が國に入寇して大敗す(弘安の役)	同 義輝	三二〇	一五〇	我が國朝鮮をうつ
同 同	一四一	一三六一		同 後陽成	三五三	一五三	
同 同				同 豊臣秀次			

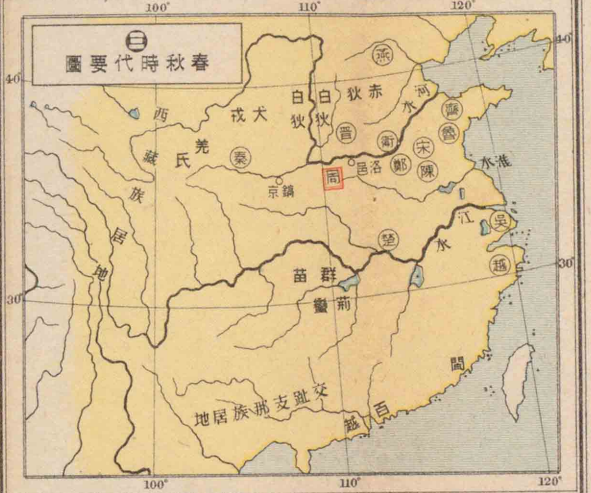
第一圖



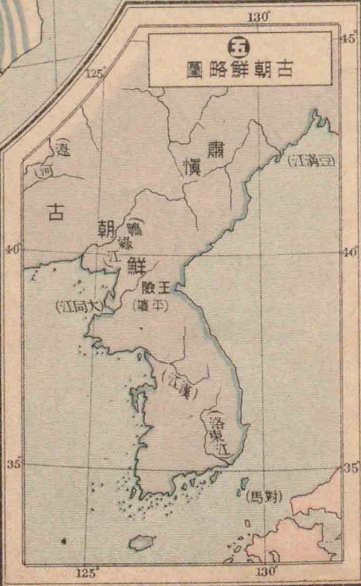
現代東亞圖



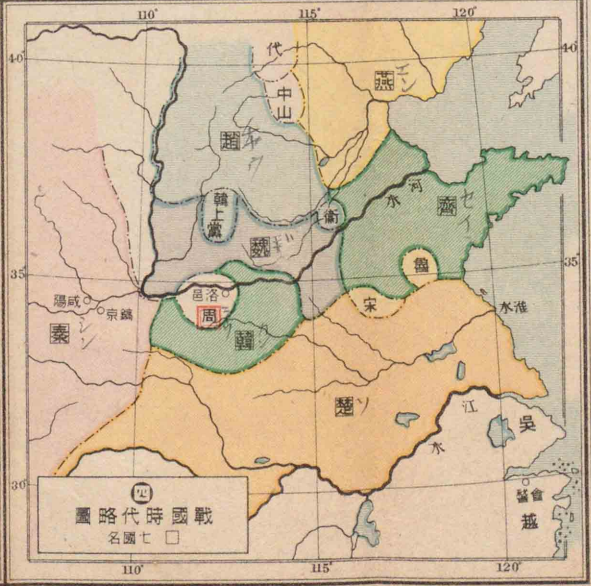
周代以前要地圖



春秋時代要地圖



漢朝圖



戰國時代要地圖

印度時代佛教地圖

圖一第



圖二第

圖亞細亞代漢

1:45,000,000

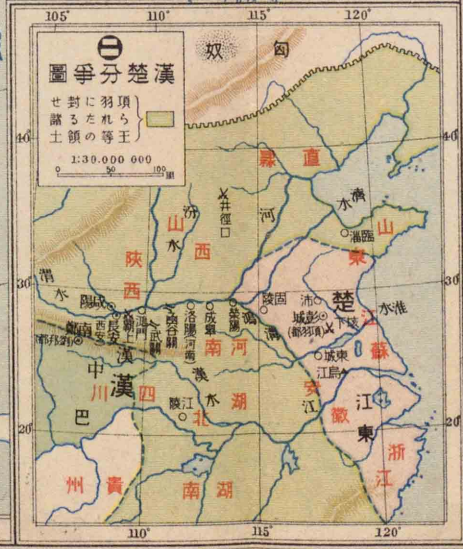


- 漢の最大の版圖
- バチルパの最大の版圖
- 大月氏の最大の版圖
- 羅馬の最大の版圖
- 東西陸上交通要路

漢楚分爭圖

羽項に封せ
 たらん諸王の
 等士

1:30,000,000



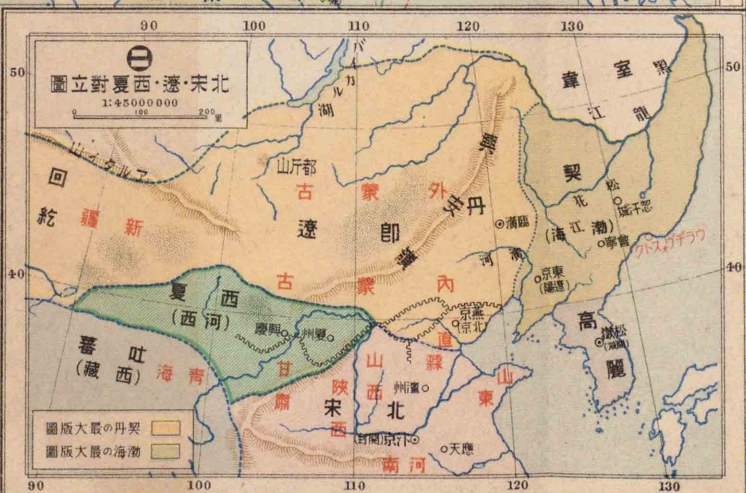
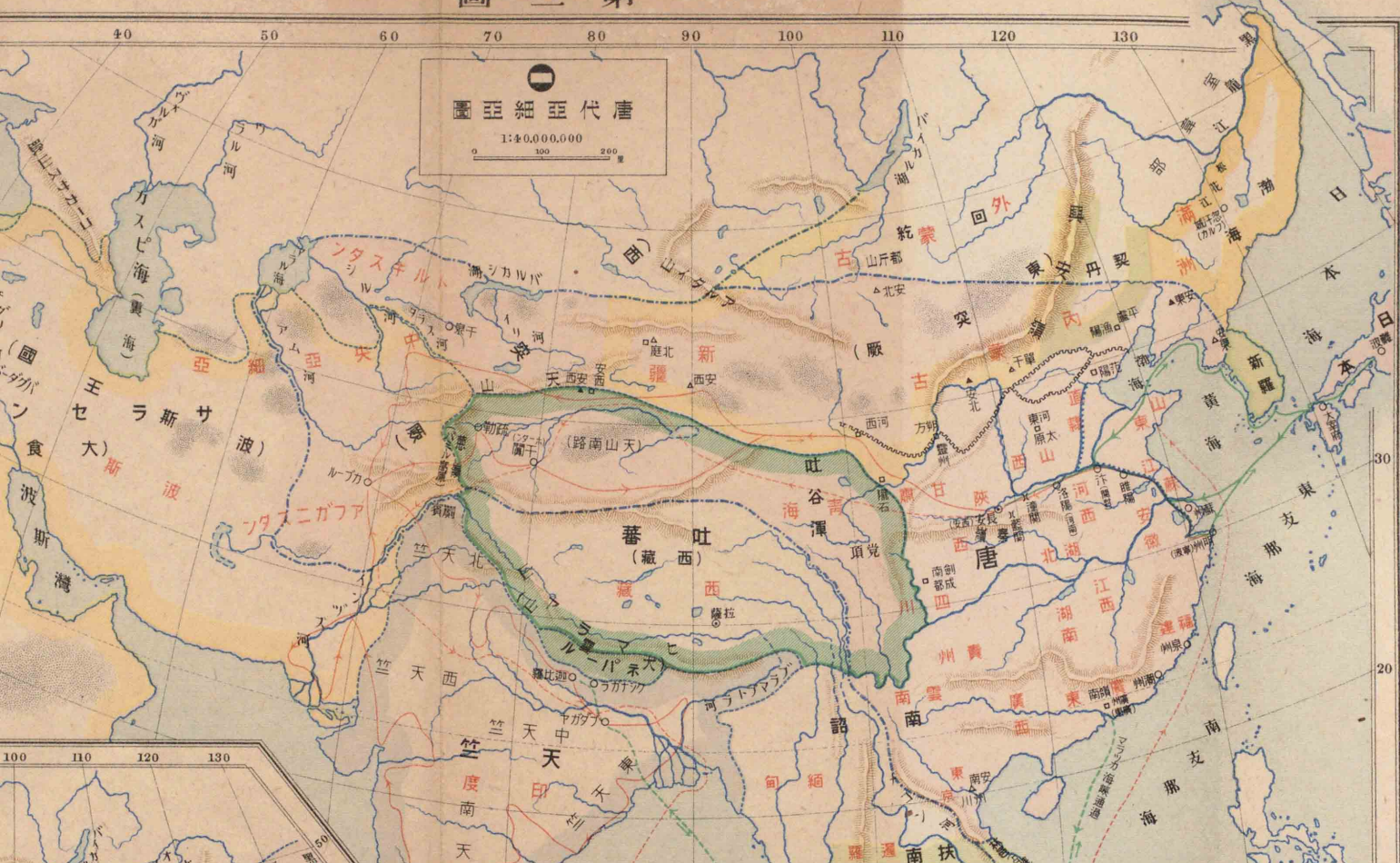
圖二第



圖三第

圖亞細亞代唐

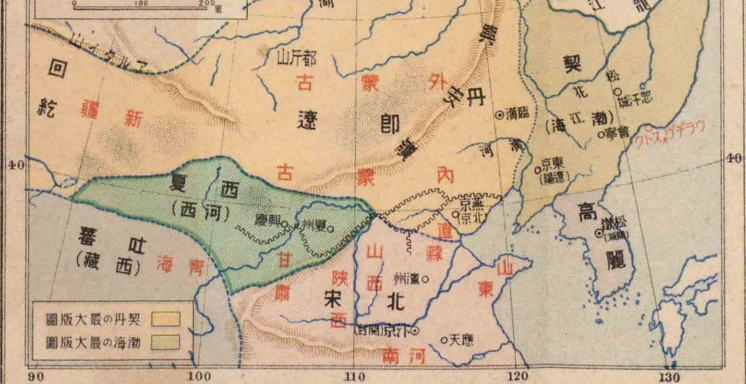
1:40,000,000



- 路行の唐法代時普東
- 路行の契玄
- 路行の淨義
- 路行の唐親本日
- 地在所使度筋十の宗玄
- 河運の時當
- 圖版大最の唐
- 圖版大最の(藏西)蕃吐
- 圖版大最の純回
- 圖版大最の國ノラサ
- 地在所府費都六
- のるるの果室はる果二形名
- のるるの果室はる果二形名

圖立對夏西・遼・宋北

1:45,000,000



圖三第



圖四第



元代亞細亞圖

- 元大版圖
- 太祖及其後裔的路
- 拔禿都的路
- 弘安役元軍的路
- 馬可波羅的路

1:40,000,000

0 100 200 里

圖四第



圖五第



圖五第





昭昭和昭和昭和昭和
 和和和和和和和和和和
 十十十十十十十十十十
 四四四四四四四四四四
 年年年年年年年年年年
 一一一八七
 月月月月月月月月月月
 一一一五四十九
 月月月月月月月月月月
 五五五五五五五五五五
 日日日日日日日日日日
 日
 修正修正修正修正修正
 正再再再再再再再再再
 三版版版版版版版版版
 版發發發發發發發發發
 行行行行行行行行行
 日
 修正修正修正修正修正
 正再再再再再再再再再
 三版版版版版版版版版
 版發發發發發發發發發
 行行行行行行行行行

女子新編東洋史
 定價金八十五錢

新中山女東洋

不許

複製

編纂者 中山久四郎

發行者 東京市神田區神保町一丁目一番地 三省堂

印刷者 東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地 三省堂蒲田工場
 代表者 龜井豐治

發行所 (東京市神田區神保町一丁目一番地) 三省堂
 (大阪市西區阿波座下通二ノ六) 三省堂大阪支店

澤金
女高一第

辻

政

枝

第二學年一組

文庫
39
530

広島大学図書
2000089530
